駆け抜ける『トキ』

羊羹mgmg

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駿川さんの元トレーナーの話。

※注意事項

・この話は史実、原作共に一部を参考にさせていただいた二次創作です。しかし史実や原作とは異なる部分も多分に含まれています。中には史実や原作に存在しないウマ娘を扱った、オリジナルキャラクターも存在します。

・また、作中に登場する『駿川たづな』はこの話限定で正体をウマ娘として執筆させ

ていただきました。モデルは現時点（２０２２年６月）で噂に上がっている『トキノミノル』です。

・この話は決して『駿川たづな』が『トキノミノル』である事を主張する意図で執筆されたものではなく、単なる作者の妄想であり、フィクションである事をご理解願います。

なおこれより以下は読者の皆様が上記の注意事項を熟読し、その内容に同意した事を前提として話を展開させていただきます。上記の注意事項に対して納得できないと感じられた方にはブラウザバックを推奨します。

では、どうぞ。

目次

本編
ホームストレッチ ―― 1
第一コーナー ―― 21
第二コーナー ―― 39
バックストレッチ ―― 65
第三コーナー ―― 94
第四コーナー ―― 127
ホームストレッチ ―― 161
おまけ
あとがき ―― 193

本編
ホームストレッチ

「……好きです」

閑散とした部屋に響く、そんな台詞。

少しばかり震える唇を意識して強張らせ、たった四文字の言葉を一文字一文字ひねり出す様にして紡がれた、そんな台詞。

心臓の音が異様なほど五月蠅い。先程までうっすらと聞こえていた外の喧騒は遂に跡形もなく消え去り、心臓を、首を、頭を、そしてこめかみを流れる血液が循環する音だけが鼓膜を揺らす。

駟不及舌。一度その言葉を声に出してしまった以上、それはもう戻ってこない。今できるのはただ、目の前にいるあなたから返事をもらう事だけ。

嗚呼、驚いておられるご様子。それもまあ当然の事かな。何せこうやってはっきりと自分の気持ちを口に出したことなんて、今の今までなかったから。

さあ……どうか。

あなたの返答を、聞かせてください。

■□■□■□

時節は桜の蕾が目立つ頃合。日差しに熱を感じ始める卯月の月旦。

あと一週間もしないうちにここ、日本ウマ娘トレーニングセンター学園……通称トレセン学園に新入生がやってくる。

新入生と侮るなかれ。高難度、高倍率の試験を制した全国からやってくるウマ娘達の上澄みの中の上澄み……その者達だけが中央の門を叩くことのできるのだ。肉体面はまだまだ発展途上ながらも、その才能、精神面、そして努力量、どれをとっても未熟だなんて口が裂けても言えない様なウマ娘達がこの学園の新入生だ。

そしてその様な宝石の原石たる新入生たちを磨き上げるのが、トレーナーの仕事と言っていい。

一人一人に合わせて原石を丁寧に磨いていき、そして最終的には眩く光り輝く宝石へと仕立て上げる。

当然容易なことではない。ここ、中央の敷居を跨ぐのが難しいのはなにもウマ娘に限った話ではなく、トレーナーとしてこの中央に所属する事もまた途方もなく難しいの

だ。

ただ真面目なだけではない。ただ勉学に秀でているだけではない。ただ親しみやすいだけではない。全てを兼ね備え、トレーナーとして求められる理想像を体現したかのような存在になって初めて、最終選考の舞台に立つことが出来る。

「注目！これよりミーティングを始めるッ！」

そしてその最終選考では、今まさに「開始！」という文字が書かれた扇子を広げている秋川理事長自らが面接を行うのだ。

学園現場職において最も高い位である理事長の席に座っている、秋川やよいという女性。一見あどけない少女に見える……というか、言動もどこか幼さを感じられるが、それでも彼女は正直自分が今まで見てきた中で一番すごい人だと思う。

通常業務もさることながら、高官につきながらもその地位に驕ることなく、謙虚に、ひたむきにウマ娘に向き合う様はまさに尊敬の一言。またその決断の早さ、行動力の高さ、そして皆を奮い立たせるリーダーシップ……これこそまさに人の上に立つ者なのだろう。

さて、そんな優秀な秋川理事長であるが、個人的に最も凄いと思う部分はその洞察力だ。

彼女が最終選考の審査役を務め、その上で見事中央のトレーナーライセンスを取得

し、晴れてトレーナーとなった者達を見ていると……そのほぼ全員がトレーナーとしての極致にいる様な人間なのだ。

勿論経験が伴っていない分ベテラントレーナーには幾分か見劣りしているのは否定しない。が、彼らもまたトレーナーとしての金の卵。将来性は途轍もなく高い。

秋川理事長の「良いトレーナー」を見抜く目は、一級品だ。

「では始めに、今年からこのトレセン学園で勤務する事となった新人トレーナーの紹介だ！」

だが、それには一つ問題があった。

「驚愕！今年の新人トレーナーはいつもより数が多い！なんと、十一人もいるのだッ！」

十一人。多くて十一人。

少ないのだ。採用されるトレーナーの数が、圧倒的に不足している。

トレセン学園に在籍するウマ娘の数は二千人前後。中等部から高等部までで計六学年ある事から、単純計算、六で割っても一学年にウマ娘は軽く三百人を超える数が在籍している。勿論ウマ娘の全員が全員競走バとしての道を歩むわけではないのだが、それでも元々トレーナーの人数もそれほど多くない以上、十一人増えたところで普通に考えて需要過多だ。

まあトレーナーの質を下げる訳にはいかないのも、理解はできるんだけどね。しかし

ながらそのつけがどんどん現役のトレーナー達に回ってきてしまうのだ。
だが、トレーナーの数が足りないのは、何もウマ娘の数が多いことだけが原因ではない。
それは……
「よし、これで十一人全員の紹介は終わったな。では次に……退職者の方を発表させてもらう……」
そう、トレーナーの離職率が異様に高いのだ。
「今年は計六名のトレーナーがやむを得ない事情で退職したッ……ぐうッ、誠に遺憾だ……！」
四月一日。世間一般では新しい何かが始まる区切りとして捉えられているだろう。事実トレセン学園でもこうやって入社式の様な事を行っている訳であるし。
だがトレーナー諸君にとっては別の意味がある。
四月一日……それは既に逝ってしまったトレーナー達への、追悼式の日程だ。
高等部三年に所属するウマ娘は三月の末に卒業する。この意味が分かるだろうか？
そう、時刻が真夜中の十二時を過ぎて四月一日になった途端、制度上ウマ娘はこの学校の生徒ではなくなる。それ即ち、トレーナーにとっての最後の切り札である「学生の間は担当バと恋仲にはなれない」という断り文句を失うのだ。後はもう……分かるだろ

う?そういう事だ。

ここにも秋川理事長によるトレーナー選考のデメリットが出ている。中央のトレーナー諸君がウマ娘に真摯に向き合う人ばかりだからこそ……ウマ娘は勘違いしてしまう。否、落ちてしまうのだ。

何に?……そりゃあ兄ちゃん、「恋」にだよ。

言い方は悪いが、トレーナー側は単に彼女らの「強くなりたい」等といった夢や願望に全力で応えているだけで、それ以上もそれ以下も無いのだ。そもそも邪な感情を抱いてトレーナーになろうとする人間は秋川理事長によって弾かれている。「あわよくば担当バと……」などという思いはトレーナー側には皆無。当然恋仲になぞ発展しない。

だが残念な事にそうやって真摯に、誠実に、真っ直ぐにウマ娘に向き合う、そんな彼らだからこそ彼女らは落ちる。ウマ娘には眉目秀麗な者も多い。だからこそ彼女らにとって内面を評価されるというのはある種新鮮であり、衝撃的であり、そして魅力的なのだ。

またそうでなくとも、ウマ娘……特に中央にやってくる子は闘争心が強い。そしてそれは自らの番を見つけるといった、生物的な本能においても例外ではなかった。そこに思春期と言う名の推進剤がおまけでついてくる。

日に日に湿度を帯びていく担当バ。そしてその子達の気持ちをある程度察しつつも

受け流していくトレーナー。

だから三月三十一日、もとい四月一日の夜は騒動が起こる。在学中に受け流されて行き場を失った鬱憤が積もりに積もり、最終的には完全に掛かり状態となったウマ娘が自身の担当トレーナーを拉致してしまうのだ。

「嘘だろっ……先輩が、先輩がいないっ！」

「糞っ……あいつは俺が育てた、未来あるトレーナーだったってのによぉ……！」

「救いは無いのですか……？」

このミーティングが始まった時点で数人のトレーナーの姿が無かった。その時点である程度察しはつくのだが、それでも嘘だと信じたいのがトレーナーの性。だが秋川理事長自らの口によって退職……もといドナドナ宣告されたからにはもう希望が無い。新人トレーナー達が呆然としている中、前年度からトレーナーとして勤めている者達は一斉に追悼の言葉を発していく。……あれ、メイショウドトウがいたような……？

「静粛！確かに悲しい事ではあるが……我々は前に進むしかないのだッ！」

秋川理事長のおかげもありパニックにはならなかったものの、やはり衝撃は大きい。が、そこはちゃんと社会人。学生の様にダラダラと引き摺る事無く、直ぐに静けさを取り戻して秋川理事長の言葉に耳を傾ける。

「気を取り直して、次は……」

最初に退職リストを聞いた分、その後の教員や事務員等に対する重要事項の業務連絡は恙なく進んでいった。一応途中にトレーナーの昇進やチーム発足の許可、或いは任命等々衝撃的なことはあったが、おおよそ予定通りにミーティングは進行していった。

そして。

「……うむ！これにて今日は以上とするッ！詳細事項は各自配布したファイルに目を通しておいてくれ！改めて新人トレーナーの諸君、トレセン学園へようこそ！歓迎するッ！」

秋川理事長は「終了！」と書かれた扇子を広げ、そのまま席を立った。そしてそれに合わせて皆も順次起立していく。勿論俺も起立し、頭を下げる。

在籍するトレーナー全員、そしてトレセン学園に所属する職員のほぼ全員を収容できるくらいの大講堂が、少しずつ賑やかさを取り戻していく。

そしてそのままトレーナー達はその大講堂を順次後にする。どうやらこの後、中堅及びベテラントレーナー達によって新人トレーナーの歓迎会が行われるようだ。如何に将来のライバル候補と言えど、ベテラントレーナーはこれ以上離職率を増やさないためにも最低限のノウハウは教えておきたいところだろうし、新人トレーナーも貴重な話が聞けるという事で、ほとんどのトレーナーが歓迎会に参加するようだ。

……懐かしいな。

「……さて」

持ってきた荷物を手に取る。その中に先程もらった資料を放り込み。

俺は彼らとは逆方向に、足を進めたのだった。

■□■□■□

学園内の大講堂を後にして、今は一人で学園をふらふらと歩いている。

視界の端にはトラックがあり、そこで今もウマ娘が数人トレーニングに励んでいる。耳には彼女らの掛け声が途切れ途切れで入ってきて、どこか寂寥感を感じさせられる。

トレセン学園は全寮制だ。それに今この学園の中にいるウマ娘が皆在学生である以上、春のレースへの意気込みは猛烈に上がっている。四月一日と言えど彼女らがトレーニングをしていても何ら不思議ではない。まあ当然今は彼女らのトレーナーが懇親会に赴いている以上、過度な練習は控えて勘を鈍らせない程度に抑えているだろうが。

そんな彼女らを尻目に、俺は近くにあった自動販売機でコーヒーを買って近くのベンチに座る。カコッ、という間の抜けた音と共に缶の口が開き、そしてそのまま口に付け

て……

「……げっ」

間違えた。このコーヒー、微糖だ。

飲めないわけではない……というかむしろ微糖の方が好きなんだが、今はこの靄がかった思考をクリアにするためにも一発苦いのを入れておきたかった。

まあもういいかな……と半ばやけくそになったその時。

「こんにちは、紫月トレーナー」

「……駿川さん」

隣からするりと顔を出してきたのは先程まで理事長の隣で資料配布や音響機材等の補佐を行っていた、駿川たづなさん。

鹿毛。身長は中の上と言ったところで、エメラルドを思わせる柔らかい瞳が特徴的だ。年齢は……怒りそうなので明言は避けるが、若くして理事長秘書の職についているだけあってかなり優秀だ。……色んな意味で。

「失礼しますね」

そう言って彼女は俺の隣に腰を掛ける。その動きにぎこちなさは皆無だった。

「俺はもうトレーナーではありませんよ」

「……嫌味ですか？貴方はそんな狭量な方ではないと信じていましたが……」

よよよ、とわざとらしく右手を目尻にあてて?泣きをする。ここで「す、すみません！」などと言って取り乱しでもしたらこの人は直ぐに嬉しそうな顔をするので要注意だ。十分に気を付けたまえ。

「はぁ……違いますよ。自慢しているみたいで居心地悪いだけです」

「あら、でもトレーナーライセンスはまだお持ちですよね?なら全部が全部嘘ではないでしょう?」

確かに持っている。何年も前に取得した中央のトレーナーライセンスだが、そう簡単に捨てられる代物ではない。

自分だって例に漏れず血反吐を吐く思いで勉強し、そして縁あって掴み取れたライセンスだ。有効期限は丁度あと一年もすれば切れてしまうだろうが、あれは一種の思い出の品としてこの先も俺の手元に残り続けるだろう。

だが、それは最早思い出だ。思い出は過去の物。今の自分はもう、トレーナーではない。

「過去の栄光に縋る様は、他人から見れば滑稽なだけですよ」

「……そんなこと、言うんですか」

っ……まずい。地雷を踏んだか。

周辺の空気が一気に凍り付く。その表情は不満半分、そして悲しさが半分、と言った

ところだろうか。

……糞。最近になってやっと、見えない尻尾と耳に慣れたと思っていたんだがな。

「そんな風に思っていたのですね、紫月トレーナー。貴方にとってトレーナーはすでに過去のものだと、そういうのですか」

「……いや、断じてそういう訳では。単にひけらかす意味がないと言ったまでです。一旦落ち着いて下さい」

「過去の栄光に縋る私を、貴方はずっと滑稽だと思っていたんですか」

「そんなことっ……！」

「貴方は私を……捨てるんですか……？」

「っっ……」

今度は嘘でもなんでもなく……彼女は泣いていた。

先程まで俺の隣で詰め寄っていた駿川さんはその威圧感をどこかへと放り出し、目尻に涙を蓄えて俯いてしまった。

苦しい。彼女をこんな姿に追いやった自分がどうしようもなく嫌で、俺は一人勝手に苦しむのだ。そこに自己満足以外の何も存在しないのに。

「っ……はぁっ……」

連打される深呼吸。明滅する視界。フラッシュバックする記憶。

苦しい。苦しい。苦しい。

……だが、一番苦しんでいるのは彼女だろう？

息を整える。

「一旦、落ち着きましょう」

誰に言っているんだ。自分に言い聞かせているわけじゃないだろう？ならちゃんと彼女の顔を見て、はっきり言え。

「俺は……あの頃を無かったことにしようだなんて、微塵も思ってませんよ」

涙を湛える彼女の目を真っ直ぐに射抜き、そう答える。

ぴくり、と彼女の肩が震える。

「あなたのトレーナーになれた事……本気で、誇らしいと思っています」

……嗚呼。全くもって変わらないな。

君のトレーナーとして専属契約して、初めてのレースに勝った時も。

君が初めてG1を制した時も。
君の足が故障して、トレセン学園卒業後でのレース出場が絶望的になったその時も。
……君の告白を、俺が断ったあの時も。

君の流す涙に、俺はいつも弱いままだ。
「だから……泣かないでくれ、トキ」
「!……ずるいです」
トキ。それは嘗て俺が彼女のトレーナーだった時の呼び名。契約当初は毎回毎回フルネームで呼んでいたのだが、「何だか壁を感じてしまいます」と言われた事で出来た愛称だ。
……まあ、後になって「どうやら『トキノ』っていう名前がついてる子は他にもいるみたいなので、トキって言うのは他の女も呼んでる感じがするので嫌です」と言われたのだが……もうなんかしっくりきちゃったのでずっとそのままだった。
他人が聞けばバ鹿らしいと感じるかもしれないけど、俺達にとっては立派な思い出がこもった愛称。俺と彼女がトレーナーと担当バだったことを示す、ちっぽけな証。
「ごめんな。言い方が悪かったよ」

「……いえ、私も少々掛かり気味でした。お互い様という事にしておきましょう」
　涙を拭い、「……よしっ」と掛け声を一言。駿川さんは先程までの気持ちを切り替え、その顔にはいつもの微笑を湛える。
「まったく。貴方といるとやはり、いつもの調子が狂ってしまいますね」
「俺のせいですか？」
「ええ、貴方のせいですよ。ふふ、責任取ってくれますか？」
「冗談を……」
「あら、私はいつでも本気ですよ？」
　にこにこしながら俺の顔を覗き込む駿川さん。昔はもっと可愛げがあったのに……今は何というか、立派な大人になってしまったな。
「それで……大分遠回りしてしまいましたが、どういった用件で？」
「むっ、あからさまに話題を逸らさないで下さい」
「そうは言っても、あなたももう立派な理事長秘書なんですから。暇じゃないでしょう？」
「それはそうですが……」
　特に今の時期は新入生の受け入れに関する事で忙しいはずだ。勿論入学手続き等は終わらせてあるだろうが、丁度昨日にウマ娘達が卒業したことにより寮の空き部屋がで

きるはず。それに付随して新しい子へ割り振る為の部屋のチェック等も必要なはずだ。
「とは言っても、今日は本当に貴方の様子を見に来ただけですよ？大層な用件はありませんし」
「……？」
「個人的に心配になっただけです。貴方が昨夜ウマ娘に連れ去られていないか……念の為ですが、しっかりと確認しておきたかったので」
「朝メールで確認しましたよね？というか、昨晩から明朝までずっと数分おきにメールを送るのは止めてくださいよ」
「ちゃんと顔を見て、声を聴いて、貴方に触れて、確かめたかったのです。あとメールはちゃんと全部返してください」
「俺に寝るなと言うんですか……？」
「ええ、昨夜くらいは完徹してください」
「……まじかよ」
「まじです」
　ぷんすか！といった感じで頬を小さく膨らませて抗議の意を俺に向けてくる駿川さん。これに関しては一体俺の何が悪いってんだ……？
「大丈夫ですよ。今更連れ去られたりしませんって」

「貴方の自分の事に関する『大丈夫』は信用できません」
「いや……俺をウマ娘による拉致から守るために、トレーナーから教官にジョブチェンジさせたのはあなたでしょう？忘れたんですか？」
　そう、俺は彼女の要望もあってトレーナーを辞退し、半ば強制的に教官になったのだ。最終的には俺自身も了承したが、逆にあのまま了承しなければ強硬手段が取られていたのではないかと思えるほど、あの時の駿川さんは鬼気迫る勢いだった。どうか彼女の提案に頷く事しか出来なかった俺を許してほしい。
「勿論覚えていますよ。他にも貴方の担当ウマ娘を逐次変更したり、貴方の住むスタッフ寮の部屋を特注にしたり、理事長に無理言って貴方のスケジュール調整を一任してもらったり……色々しています」
「えええ……最後のは初耳なんですが」
「それは勿論、言ってませんでしたから」
　職権乱用じゃん。何やってんの？
「ともかく、貴方が無事で安心しました。これで私も仕事に身が入ります」
「無理はなさらないように」
「勿論ですよ、紫月トレーナー。貴方の教えを私が破ったことがありましたか？」
「……ありましたよ、沢山」

「むぅ、そう言っていじわるするトレーナーさんには……えいっ」
不意に立ち上がったと思ったら、駿川さんはそのまま俺の飲みかけの缶コーヒーを引っ手繰る。あっ、返せ。
「また微糖ですか。まだまだおこちゃまですね～～♪」
「今日はブラックを飲む気だったんですよ」
「はいはい。聞き飽きましたよ、その台詞。それじゃあ失礼しますね♪」
「あっ……もう行ったか」
既に近くに駿川さんの姿は無く、遠い先にある絶賛走行中の小さな背中が目に入る。
速い。あの人本当に隠す気あるんだろうか。
「……」
なぁ、トキ。
俺達……どうすればいいんだろうな。
君はきっと、俺が君のトレーナーだった頃から抜け出せないんだろう？
俺が君の告白を断っても、きっと君は諦めきれなかったんだろう。かと言って拉致監禁の類の暴挙に走ることはせずに、第三の選択肢……トレセン学園の職員となり今度は俺の同僚として関係を築くという、逃げの一手に走ったのだ。
そして俺が他のウマ娘を担当するつもりだと知った時……君は掛かり気味で言った

よな。教官になれ、と。私以外の担当バは認めない、と。
教官として受け持つウマ娘を、他の教官では有り得ない程短いスパンで交代させて少しでも俺に癒着させないようにした。スタッフ寮にある俺の部屋も、ウマ娘の襲撃に耐えられるように特注で改装した。

そして俺は、君の願いを断り切れない。
たった一つ、君が俺に送った告白という例外を除き、俺は君の要望を殆ど受け入れた。教官になれと言われた時も幸いまだ誰を担当バにするかは決まっていなかったが、それでもスカウトする直前に貰った君からの要望を俺は受諾し、すぐ理事長に教官になりたいと頭を下げた。
それは別に、駿川さんが俺を脅していたわけではない。
俺には……彼女の足を壊し、バ生を、未来を、奪ってしまった責任がある。
いや、責任などという立派なものでもないな。単純に彼女の未来を奪い、歪めてしまった自分を慰めるための自己陶酔。責任などと言う客観性に満ちたものとは微塵も相容れない、限りなく利己的で醜悪で偽善的な欲望。その欲望に抗う事もせず、俺はずっと逃げているんだ。
俺が彼女の告白を受け入れられなかったのは……君の目に映る俺のトレーナー像を、

自分が否定したかったから。
君のトレーナーは碌な者では無かったんだと、そう自分に言い聞かせたかった。これもまた俺の中に燻り続ける、かの欲望が故。

君は、俺がトレーナーだった時が忘れられない。
俺は、君が俺をトレーナーとして見ている限り、自分で自分を許せない。

俺達の時間は……君が足を壊したあの時からずっと、止まったままだ。

第一コーナー

『2：19：6』

このタイムは東京優駿……つまり、日本ダービーのレコードだ。

当時の二分三十秒前半台のレコードを十秒以上縮める、最早異常な成績。当時それを目の当たりにしていた者は喜ぶことも、悔しがることも、感動する事さえも略奪され、只々その結果に首を傾げる事しか出来なかった。常塗り替えられる事暇ないはずのレコードは、諸行無常を一笑に付すかの如くこの六年間君臨し続けたのだ。

制度の改善、技術進歩によるバ場の質の安定化、施設の拡充、走法の発展、レース運びの多様化、そして何よりトレーナーによる訓練の質の向上によりウマ娘全体の走力が上がったと言われる今でなお塗り替えられていないその偉大なレコードは、今ではすっかり観客を魅了し、レースに憧れるウマ娘を鼓舞し、同時にレコードを狙う最優のウマ娘を絶望へと叩き落してきた。

今でなお破る事の出来ない、二分二十秒の壁。トレーナーとウマ娘が一蓮托生の思いで精進し、ライバルと共に鎬を削り、レースの場で今までの全てを出し切り、そうやっ

て生まれてきた、時代の頂点に君臨する歴代のウマ娘達……その全てを一蹴するかの如く立ちはだかるレコード。まるで壁なんて存在しないと言わんばかりに打ち立てられた、二分十九秒台のタイム。それも今と比べれば劣悪と言わざるを得ない環境下で。

それ程までに幻のウマ娘……トキノミノルが叩き出したレコードは偉大だった。

メイクデビュー戦でレコードを叩き出し、そのまま最早敵なしと言わんばかりに勝ちに勝ちを重ね、最後の東京優駿は今もなお塗り替えられていないレコードを記録した、まさに歴代最強ウマ娘の一角。戦績は十戦十勝……つまり一度も敗北を経験した事無く、その十勝の内計七度はレコードを記録し、見事クラシック二冠を成し遂げたのだ。

このまま秋の菊花賞を念頭に、三冠も十分狙える……そう信じられていた矢先で起きた悲劇。

トキノミノルは足を故障した。それも、一年や二年では復帰できない程深刻に。

当時は高等部三年の五月。トキノミノルは高等部に編入生としてやってきて、その年の初夏にトレーナー契約を結んだ。そのまま入念な訓練と調整がなされ、来年の夏にメイクデビュー戦をこなし、そのまた来年の春には皐月賞を掻っ攫った。

その約一か月後に迎えた東京優駿で彼女は今後のバ生の全てを出し切り、異常なレコードの代償としてその足を失ったのだ。

まだ秋には菊花賞が残っていた。トレセン学園卒業後でも、遅まきながらではあるがシニア級への参加は認められていた。だがそれらは全て足の故障により、実現から空想へと成り下がった。

当然、世間からは悲しみの声が後を絶たなかった。だが時代と共にその声は別の形へと変容していき、そのレコードも相まっていつしかトキノミノルは、東京優駿に深い思い入れがあるウマ娘として扱われてきた。

間違いではない。実際トキノミノルは今でも東京優駿の記憶は他の記憶とは一線を画す過去の栄光として多少なりとも捉えているし、それをバ鹿にする事など誰にもできないのは自明。

だが、それでもなお時代の流れに取り残された人間がたった一人、存在していた。

それがトキノミノルの元トレーナー、名を紫月という男だ。

彼の中でトキノミノルが打ち立てた東京優駿の偉業は、等しく彼の担当バの足を壊してしまった原因でしかなく、自分を蝕み続ける劇薬の類であった。彼の目に映るトキノミノルは自分の落ち度で三冠……或いはそれ以上の、今よりもっと輝かしい未来を掴み損ねた被害者であった。

彼の中で自分自身へ下す評価は、単なる加害者でしかなかったのだ。

■□■□■□

駿川さんに微糖の缶コーヒーを奪われてから一週間が経過した。

喧騒。トレセン学園は数多くのウマ娘の声に満ち溢れ、どこもかしこも人間にはついていない耳と尻尾がピコピコ動く光景で一杯になっている。

この時期のトレセン学園は一年を通しても三本の指に入る程活気がある。

第一に、新入生。つい先日入学式を終えたばかりのウマ娘達だ、当然自分のバ生を預けるこの学園に興味が湧き、あちこち走り回っては大小様々なれど感動する事もあろう。そして在校生は新入生を歓迎しようと多くの催しを開く。単純に学園が賑やかになるのだ。

第二に、レース。桜花賞に皐月賞、そして春の天皇賞。この四月にはＧ１レースも数多く開催され、そしてそのすぐ後の五月にはかの東京優駿が待っている。特にこの四月のＧ１は三冠を目指すウマ娘にとっての登竜門であり、またそうでなくとも今年のレースの流れを掴むためには大事な一戦だ。別に他のレースを低く言うつもりは毛頭ないが、それでもこの四月のレースには、ウマ娘達も気合の入れ方が違う。今もグラウンドではレースに向けて最後の調整を行っている在校生の姿が散見される。

そして第三に、トレーナー。今年から新しく担当を持つトレーナーは新入生の中から

自分が求める原石を血眼になって探している。また、今年は担当を取らないトレーナーだって将来のライバル候補はいち早く知っておきたいところだろう。約一週間後には開催されるであろう選抜レースはどの年も大盛り上がりだ。……だからこそ、夜になってトレーナーがほとんど退散した後でも、スカウトされる事無く走り続けるウマ娘の姿には胸が痛むのだが。

そんなわけで、この時期のトレセン学園は活気に満ち溢れているのだ。

だが、今の俺の周りにはそんな活気は何一つ存在しない。

時刻は午後に入ったばかりだが、入学シーズンの今は本格的な座学にはまだ入っておらず、この時間でも既に校舎内外問わず喧騒に満ちている……のだが、この廊下だけは話は別。この廊下の向かう先には資料室や事務室、教務室に生徒会室といった、生徒があまり立ち寄らない部屋しか存在しない。故に、今生徒会室へと向かっている俺が踏みしめているこの廊下に響くのは、俺の足音だけだった。

コンコン、と俺は目の前に広がる重厚な扉にノックをする。堅く、安っぽい響きは何処にもない。自分の指に返ってくる重い振動が、どこか箱鳴を感じさせる。

「どうぞ」

扉の奥からの返事は、良く通る凛とした声。音量が大きいとか、音が高いとか、そんな次元の話ではない。扉一枚隔てても肌で感じられるほどの存在感が彼女にはあった。

「失礼するよ」

重い扉を押し開けて目に入るのは、我らがトレセン学園の生徒会長を務める『皇帝』シンボリルドルフ。歴代の生徒会長の中でも一、二を争う程の優駿であり、現役最強を飛び越えて歴代最強の声すらも上がっているウマ娘だ。

おおよそ生徒とは思えない程の威圧感を蓄えた彼女は、その紫紺の瞳をもって俺の目を真っ直ぐに射貫いてくる。この子のトレーナーはこの威圧感に毎日当てられてもピンピンしてるんだから、そのメンタル面は素直に尊敬だ。いや……成長したなぁアイツ。

思わぬ所で後輩の成長を実感する羽目になったが、本題は勿論そこじゃない。少なくとも俺と彼女との話し合いの為だけに予め時間が設けられているくらいには重要な話だ。流石にここで会長からトレーナーの惚気話が飛んでくる事はあるまい。

「さあ、かけてくれ」

「ああ」

彼女の手が促すままにソファーに腰掛ける。今時の生徒会室とは思えない程の豪華な椅子に、再度トレセン学園における生徒会の権力の高さを痛感させられる。

「どうぞ」

「気を遣わなくてもいいのに。すぐ終わるだろうし」

「そういう問題ではない、全く……」

やや形式ばった所作で机の上に茶を用意するのは『女帝』エアグルーヴ。生徒会役員の中でもこうやって会長と共に話し合いに参加しているあたり、会長からの信頼の深さが見て取れる。

シンボリルドルフも向かいのソファーに腰掛け、それに応じてエアグルーヴもすかさず器に茶を注ぐ。

俺と彼女の間を呑気に漂う、お茶の湯気。この緊張感を含む冷たい空間には何処か場違いで、湯気はシンボリルドルフから発せられた言葉に押し出され、霧散していく。

「長話は無用、といった顔だな。では単刀直入に聞こう。君は本当に、トレーナーライセンスを放棄しても良いんだな？」

……俺が今日この生徒会室に召喚された理由は他でもない、トレーナーライセンスの有効期限に関する最終確認だ。

トレーナーライセンス。

日本国内でも屈指の獲得難易度を誇る資格であり、中でも中央のそれは別格と称されている。称されている、と暈しているのはトレーナーライセンス取得の条件は基本的に地方も中央も変わらないからだ。

当然だ。何処に居たってウマ娘を指導することに変わりはなく、それに応じて試験の内容は筆記も実技も変わらない。変わるのは精々倍率と面接官くらいだろうな。まぁ中央は秋川理事長が面接官を務めている分、そこの違いを「精々」と片付けられるのかは甚だ疑問だが。

制度上の違いは何処にも無い。だが、事実として同じライセンスでも中央で取るのと地方で取るのとでは小さくない差が生まれてしまっている。それこそ、中央のライセンス持ちトレーナーならば地方のウマ娘育成期間で採用試験を大幅に免除される一方で、その逆は事実上不可能と言われているくらいには。

まぁ結局何が言いたいのかというと、トレーナーライセンスは制度上国家資格である一方、その実情は民間資格と化してきているという事だ。

国が定める資格取得の基準……その基準も決して低いわけでも無いのだが、それに飽き足らず更に質の良いトレーナーを中央は求めた。国立の人脈と権力、レース運営による豊富な資金力を最大限活用し、遂にはトレーナーライセンス取得がトレセン学園就職の必要条件に過ぎないという理をぶち壊し、そこに十分条件も付与したのである。つまり、中央のトレーナーライセンス獲得とトレセン学園への就職を同義と定めたのである。

本来それを持つ者の知識や技術の絶対性を保証する代物としての「資格」のはずが、中

央だけに許された権力により、倍率という相対性が付与された。これこそが資格でありながら地方と中央で格差が生まれた最たる理由である。

さて、そうやって独自の進化を遂げたトレーナーライセンスだが、その末路として極めて特殊な取り扱い方をされるようになった。

国家資格として、トレーナーライセンスは一律に有効期限が設けられている。その期間はライセンス取得から十年間、そして最終更新日から五年間だ。これを過ぎればトレーナーライセンスは剥奪され、再度試験を受けなければならなくなる。

だがその一方で、トレーナーライセンスの管理はトレセン学園に一任されている。それこそライセンスの発行から更新まで、全て。

だからこそ、今俺の目の前に鎮座しているシンボリルドルフに俺のトレーナーライセンスの管理が可能なのだ。

トレーナーライセンスは個人情報の塊だ。生徒会長と言えども所詮は生徒、普通はライセンスの管理はおろか、閲覧さえトレーナー本人の許可無しでは叶わない。だが中央の持つ絶大な権力の分散、及び学園の掲げる目標である「生徒の自立心の尊重」により、生徒会に一部権力が流れて来たのである。

「……ああ、気持ちは変わらないよ」

「そうかい。私個人としては更新くらいしておいても損は無いと思うのだがな」

「更新だってタダじゃない。そうだろう?」

通常の資格がどうかは分からないが、トレーナーライセンスは更新に一定の条件が課せられる。直近五年の内でウマ娘を一年度分以上担当するか、或いは更新試験に合格するか、大きく分けてこの二つのどちらかが条件となる。

更新試験は通常避けられる。単純明快、合格難度が高いからだ。となれば担当バを持つのがセオリーなのだが、俺の担当バはトキノミノル、ただ一人。あの子の担当を離れてもう五年以上はウマ娘を担当していない事になる。

そして、今年の四月一日で俺はトレーナーライセンスを取得してから十年目に突入した。つまり来年の四月一日までがライセンスの更新期限であり、今年の四月中に担当を持たなければライセンスを更新するには試験を受けるしかなくなる。

「このまま教官を続けるよ。現状特に不満もないし……恥ずかしい話、もうトレーナーとしてやっていく自信が無いんだ」

「謙遜を。君の教官としての腕だって良い評判は度々耳にする。トレーナーとしてだってやって行けるさ」

「技術や知識と、精神面は別の話だ。俺が自分の手で担当バを指導して勝たせるイメージが、もうどうしても抱けない。そんな奴がトレーナーになってもいい迷惑だ」

「それは……」

　その沈黙は肯定と受け取るぞ。ほら、話なんてすぐ終わる。
「君も忙しいんだろう?さぁ、話は終わりだ。前に提出した書類通りに頼むよ」
「……残念だ。君をトレーナーにしたいと言う子の話も良く聞くから、君がトレーナーとして復帰するならば彼女の希望も叶い、君のライセンスも更新でき……正直双方に理があると思うのだがな」
「……」
　まあ、君の言っている事も間違いではあるまい。というかむしろ、一般的にはそちらが正しい意見だろうな。
「少し、勘違いをしているようだな」
　でも、これだけは正しておきたいのが俺達トレーナーの性ってもんだ。
「シンボリルドルフ。君は少々、トレーナーライセンスを美化しすぎだ」
「……ほう?」
「確かに、中央ライセンスの取得難度は高い。ライセンスを取得できず夢半ばで散っていくトレーナー志望の人間が数多くいる事も、分かっているつもりだ」
「だがな……ライセンスは試験さえ受かれば何時でも取得できる。一度失効したところで取り返しなぞいくらでもつく」
「対して、ウマ娘のバ生は一度きりだ。才能が有ろうが無かろうが、努力する子だろうが

そうでなかろうが、そんなことはどうでもいい。皆等しく持っている、文字通り掛け替えの無い物だ」

「肝に銘じておけ――シンボリルドルフ。たかがライセンスごときの為に、軽々しくウマ娘のバ生を踏みにじるな」

例え彼女らが俺をトレーナーになるよう望んでいても、それに応える気概も能力も無い加害者が預かれるほど――ウマ娘のバ生は軽くないのだ。

「貴様、会長に何という口利きを……！」

エアグルーヴの荒らげられた声で、熱を帯びていた思考が冷めていく。

彼女からしたら尊敬する生徒会長をパッとしない教官が説教垂れてるのだから、そりゃあ当然面白くないだろう。よくよく考えたら結構な物言いしたな、俺。謝ろう。

「……済まない、少し気が立ってしまった。忘れてくれ」

フン、と面白くなさそうに小さくそっぽを向くエアグルーヴだが、彼女の耳は落ち着いている様子。何とか矛は収めてくれたらしい。

「会長、これ以上の話し合いは無用でしょう。さっさとこのたわけを追い出して……会長？」

「ふ……ふふふ、はははっ！」

「か、会長？如何されましたか？」
　突然、高らかに笑いだすシンボリルドルフ。別に俺を嘲笑っている訳でもなく、かと言って可笑しい事を言った記憶も無い。というかむしろ彼女からしたら気分が悪い事しか言ってない。……どしたん？
「ふふ……いや、失敬。トレーナー君以外にこうやって注意を受けるのも、何だか新鮮でね。忘れていたよ、確かに君達『トレーナー』はそういう人種だったな」
　……？何の話だ？何に納得したんだ？
「ああ、肝に銘じておくとも。そして君の意思も堅いようだし、上には君が教官のままで居続ける気だと報告しておこう」
「ああ、よろしく頼むよ」
「ライセンスの更新自体は今年一杯は出来るはずだから、もし気が変わったなら試験を受けると良い。ただ、資格取得試験と違って更新試験は中央が作る。そう甘くは無いと思うよ」
「大丈夫、承知済みだ」
「よし……なら話は終わりだな。わざわざ足を運んでもらって悪かったね」
　シンボリルドルフは目の前にある器を手に取り、ゆっくりと茶を啜る。
　気付けば目の前にはお茶の湯気がまだほんのりと上がっていた。俺も流れるままに

お茶をぐっと最後まで嚥下し、その場で立ち上がる。
「……ああ、そういえば私からも一つ」
ソファから移動して扉に手をかけようとしたその時。シンボリルドルフは落ち着いた声で、そう宣う。
「確かに、君のライセンス事情でウマ娘を担当するように勧めるのは、些か配慮に欠ける事だったかもしれない。だが、私達のバ生は担当トレーナーですべてが決まる訳じゃない。そう単純な話じゃ無いのは君も知っているだろう?」
「……」
「そうやってウマ娘を大切に扱う『トレーナー』諸君の気持ちを無下にするつもりは無いし、むしろ素晴らしいと個人的に思うのだが……ウマ娘は君達におんぶ抱っこされないと走れない程、柔な生き物じゃない」
「だからこそ……そろそろ君も、自分自身を許してやらないのか?」
「っ……」
……流石『皇帝』だ。痛い所を的確に突いてきやがる。勿論悪気は無いのだろうし、むしろ心配してくれているのは分かっているのだが。
「すまない。こればっかりは……そう簡単に治りそうもない」
「急かしはしないさ。君の気持ちも良く分かる」

「助かるよ。では、失礼する」
今度こそ扉を押し開けて、俺は生徒会室から抜け出す。そしてそのまま扉が閉まり、部屋の中の音が俺の耳に入るのを遮った。
依然としてこの廊下は静まり返ったままだった。だがこの廊下を進めば、きっと多くの人やウマ娘が所狭しと並んでいるだろう。
「許す、か。それはまた、難しそうだな」
だから俺の独り言は、一先ずここに置いておくことにした。

■□■□■□

「……会長、どうなさいましたか？」
「何がだい、エアグルーヴ？」
「いえ、あのような暴言を吐かれて、笑っておられましたから……」
怪訝な顔を浮かべてエアグルーヴは横にいるシンボリルドルフにそう訊ねる。流石に暴言を吐かれて直ぐに憤るような真似はしないだろうが、決して気分が良くなるものでは無かったはずだ。だが起こった事態は真逆……微笑むことは多々あれど、声を上げて笑うのはシンボリルドルフにおいては稀な事。「注意を受けるのが新鮮だった」など

という理由では、エアグルーヴには到底今の出来事に納得が出来なかった。
「いや、別に大したことではないんだ。昔、理事長が仰っていた事をふと思い出してね……それがあまりにも今回のケースで的を得ていたものだから、可笑しくてつい笑ってしまったんだ」
「理事長の言葉、ですか」
　照れ隠しか、少し苦笑いをしながらそう答えるシンボリルドルフ。一呼吸を置いた後、苦笑いを作っていた口はゆっくりと形を変え、落ち着いた声で話を続けていく。
「私がまだ生徒会に入ったばかりの頃だったか。理事長が良いトレーナーの見分け方の様なものを仰っていてな。その中の一節で……」
　――他には……そう！トレーナーライセンスを託したいと思える人間程、そのライセンスの価値をまるで分かってないのだ！……えっ、バ鹿にしてる？誤解ッ、文句を言った訳ではない！だが事実として、トレーナーライセンスは彼らにとっては非常に貴重な物なのだ。身分証明は勿論、あれはトレセン学園のトレーナーである証として、彼らがそれを取得するまでに費やした努力と才能の証明……いわば彼らの今までの人生そのものだ。それほど貴重なライセンスなのだが……ふふ、愉快ッ！それでも彼らはウマ娘の為ならばライセンスなぞ喜んで溝に捨てる様な、そういう変態集団なのだよ！

「……ふふ、そっくりそのまま理事長の言っている通りの出来事が起こったのだ。面白いだろう?」

くつくつと笑うシンボリルドルフ。実際にその場に居なかったエアグルーヴは笑い処を捉え切れず、控え目に愛想笑いを浮かべる。

「そうなると益々、惜しい人材だったな。彼女のお願いもあったから彼にはトレーナーとして復帰してもらいたかったが……仕方あるまい」

「私としては彼女がこれを聞いて掛かり気味になりそうなのが心配ですね」

「全くだよ」

そうやって生徒会室で二人が談笑している所に、コンコン、と良く響くノックの音が響き渡る。

「おや……噂をすれば、というやつかな」

ノック一つ取っても為人は現れる。シンボリルドルフなら丁寧に、それでいて重く響く音、エアグルーヴは鋭く突き刺さる音、ナリタブライアンは……そもそもノックをしないが、ともかくこの様に音の中でも微妙な違いが現れるのだ。そしてウマ娘には人間では気付けない程の微妙な差異がはっきりと認識できる。

だから慣れない相手ならともかく、良く見知った生徒会メンバーである彼女のノックを、この二人が聞き間違えたりはしない。

「開いているよ」
「はい、失礼します」
そう言ってドアを開けたのは、トレセン学園の制服に包まれたウマ娘。
鹿毛の髪は腰あたりまですらりと伸び、身長は平均よりかは高め、耳は小さく控え目だ。顔は可愛いというよりかは端正に近く、上品さや煌びやかさはその綺麗さを醸し出している。感覚的に捉えるなら、クールで大人びたウマ娘といったところか。
「突然で申し訳ありませんが……生徒会の業務に入る前に、先程此処を出た彼……紫月教官の返答を聞かせてもらえませんか？」
大きな目を常にキリリと結び、やや三白眼気味の目でシンボリルドルフを真っ直ぐに見つめる。普段の透き通っている瞳はやや光を失ってのっぺりと赤紫色を広げており、耳はやや絞られている様子。
「ああ……分かったよ、トキノメグル」
彼女……もといトキノメグルは、まだ温かみの残っているソファに腰を下ろしたのだった。

第二コーナー

「どうだ、晶？緊張するか？」
「ええ……そりゃあもう」
桜の花びらが落ち始め、新緑が姿を現し始める頃合い。視界の先には午前の授業を終えてターフに集まってきたウマ娘達がいた。
だがいつもの明るい雰囲気はやや抑えられ、代わりに濃密な緊張感が漂っている。
自信に溢れた子、緊張で震えている子、いつも通り落ち着いている子。皆それぞれの想いを胸に秘め、それでもそこにいる誰もが静かに闘志を燃やし、入念にウォーミングアップを熟す。
今日はトレセン学園の選抜レースの日。ウマ娘達にとっては自分の実力を公の場でトレーナーに披露する日であり、トレーナーにとっては数多のウマ娘の中に眠っている宝石の原石を探し当て、場合によっては奪い合う日だ。
だから俺――――紫月晶もまた、生涯初めて行うウマ娘のスカウトに緊張していた。
縁あってトレーナーライセンスを獲得し、トレセン学園に勤務するようになったのは

丁度一年前。そして今隣にいるベテラントレーナーたる先輩の下で一年間、サブトレーナーとして勤務してきた。

だが、それも去年までの話。今年から晴れてトレーナーとなった俺は秋川理事長の辞令により、一人担当を持つ計らいとなった。

ということで早速先輩から助言を貰いながら、初めてのウマ娘のスカウトに赴いているという訳だ。

「基本的には担当にしたいと思う子にアプローチをかけるもんだが、さじ加減を忘れるなよ」

「はい、勿論」

「そしてこれは俺個人の見解だが……選抜レースをする以上足の速い子が人気になるが、足の速さより内面を重視した方がいい。そしてそれを理解しているトレーナーも此処には沢山いる以上、この選抜レースは視点を変えろ。レースに注目したくなる気持ちも十分理解できるが、そこだけに集中するな。レースを待つ子達の素振り、ゲート内の様子、そして何よりレースを走り終えた時の顔……兎に角、レースばっかりに気を取られるなよ」

「ええ。出遅れれば意中のウマ娘に逃げられてしまう……ですよね？」

「そういうこった――――おい、晶」

そうこうしている内に選抜レース開催の合図が流れ、ウマ娘達は次々とゲート近くへと集まっていき、予め伝えられている列へと並んでいく。

「しっかり見とけよ。もしかしたらあの中に、この世代の王がいるかもしれねぇんだから」

列の先頭にいた九人全員がゲートに入る。緊張で顔を強張らせている者が半分ほど、自信家が三割、残り二割がマイペースで落ち着いている子と言ったところか。

ゲートが開く。そして皆全力を尽くして走り出し……

■□■□■□

選抜レースが始まってから既に一時間以上は経過したが、それでもなお此処にいるウマ娘の三分の一程度しか走っていない。

それはそうだ。選抜レースに参加するのは何も新入生だけではない。前年度にスカウトされなかったウマ娘も当然走っており、新入生合わせて総勢千人を軽く超えるウマ娘が此処にいるのだから。

だが一時間は一時間。それなりの時間をずっとウマ娘の観察に費やしているだけあって、流石に緊張はほとんど無くなったし、何となく自分の中にある琴線も掴めてく

る。
「もう三分の一は行ったか。どうだ、良い奴いたか？」
「何人かは。けどぶっちゃけてしまうと全員良い奴ですよ」
「それを言っちゃあしまいだろ。まあでもその様子だと、こう……ビビッと来る奴はいなかったようだな」
「まあ……そうですね」
　正直、そういう子が現れるのかどうかも分からない。何ならそのビビッと来る感覚を既に味わっていながらも見逃してしまった可能性すらある。一流のトレーナーは教える事以上に名伯楽たれ、と耳にするが、それが正しいなら俺はド三流だな。
「おっ……」
「二番の子、速いですね」
「ああ、才能も申し分ない。名前は……『イツセイ』か。ありゃあ多分、この世代で三本の指に入る強者になるだろうよ」
「素人目から見ても分かっちゃいますね。周りのトレーナーも立ち上がってますし、スカウトする気満々ですね」
「お前は行かねぇのかよ」
「何というか……しっくり来ない感じです」

「そうか。まぁ焦ることは無い。今日で終わりってわけでもねぇしな」
足の速さだけなら良い子は沢山いるんだけどね。何というか、少し物足りない気分がある。その気分に従うのが吉か凶かは不明だが……

「――――――」
いた。
視界の先にいる、エメラルドの瞳を持つ一人のウマ娘。
きっとこれが先輩の言っていた、ビビッと来る感覚なのだろう。
「見つけた」
「ん？」
「五番の子。次一着を取ります」
「そうなのか？確かにまあ速そうではあるが……」
「先輩、失礼します。俺はもう行きますね」
「……どうやら見つかったようだな。ああ、気にせず行ってこい」
「はい」
先程のウマ娘の影響もあってか、残っている他のトレーナーはまだあの子に気づいていない様子だ。まあそんな事、どうでもいいが。

トレーナーが犇めくスタンドを一人立ち上がる。向かう先は、まだウマ娘が出走さえしていないトラックの、そのゴール。
スタートの合図。ややどよめくトレーナー陣。駆ける一陣の風。一着が決まる音。
スタンドから数人のトレーナーが立ち上がる。それを尻目に、今しがたゴールに誰よりも早く駆け込んで来たその子に、真っ先に声を掛ける。
「君が欲しい」
「えっ」
しまった。少し気が逸りすぎた。
「ンンッ……失敬。要するに君をスカウトしたいんだけど……どうかな?」
「えっと……その前にどちら様でしょうか?」
「俺の名前は、紫月晶。まだ此処に来て二年目の新人、今まで担当を持った経験も無い若輩だ」
嘘は良くない。自分の中でこの子は最高のウマ娘だったとしても、この子にとって俺が最良のトレーナーである道理は何処にもない。彼女に惹かれたからこそ、彼女の選択は尊重したい。
だから、何もない新人の俺は誠実でありたかった。
「では、どうして私をスカウトしようと思ったのですか?」

「勘だ」
「勘……ですか？」
「ああ。君の他にも速い子は何人かいたが、俺には君しかいないと、そう確信したんだ。君こそが最高のウマ娘に違いないと、そう確信した」
　すぐ後ろには、スタンドからこの子をスカウトしにやって来たトレーナーが数人駆け寄ってくるのが見えた。そしてそれに気づいた彼女は首を傾げて……
「……貴方はいつそれを確信したんですか？他のトレーナー方を見る限り、レースを見てから来たわけではないようですが」
　いつ……いつ、か。
「ゲート前でウォーミングアップをする君を、一目見た時に」
　それを聞いたこの子は、少し微笑んで。
「変な人ですね。けど……」

「ねぇ君！さっきのレース、凄く良かったよ！良かったらうちのチームに来ない？」
「いやいや、うちはどうかな？君ならＧ１……いや、三冠だって狙えるよ！」
「いやいやいやいや、こんなむさくるしい変態共は放っておいて僕はどうかな？一応此処に勤めてもう七年になるんだ」

「「むさくるしいって酷くないですか!?」」

後ろから雪崩れ込むスカウト陣の声で、少し平静を取り戻す。どうやら新人トレーナーである俺のアピールタイムはもう終わりらしい。返事位は聞きたかったのだが、仕方ない。

「ごめんね、返事はまた後で聞くよ。というか面倒だったら返事しなくても……」

「いえ、返事は今ここでします」

そう言って彼女は俺の後ろにいる先輩トレーナーの方々に目を向ける。

「トレーナー契約の話は大変有難いのですが、遠慮させていただきます。だって……」

「私のトレーナーは、もう決まりましたから」

項垂れる先輩方。そしてその先輩方を尻目に、彼女は……

「自己紹介がまだでしたね。トキノミノルと言います。よろしくお願いしますね？……トレーナーさん♪」

エメラルドの瞳は、俺をはっきりと捉えていたのだった。

■□■□■□

「どうしたの、紫月教官？」
「ああ、いや……すこし昔を思い出していただけだ。気にするな」
「ふぅん……？」
　トキノミノルのスカウトに成功してから、今日で丸八年となる。四月も既に中旬に突入しており、残す四月のＧ１も天皇賞春のみとなった。
　しかしそれはデビュー戦から三年目のウマ娘限定の話。今俺が教官として預かっている二十人弱のウマ娘の内、ほとんどは中等部の二、三年。高等部の子は二人しかいない。
　今日は選抜レースの日。中等部の子はともかく、高等部にいる子は今年に専属トレーナーを持たなければトレセン学園にいる内にシニア級である天皇賞に参加する事さえ危ぶまれる。
　勿論中等部の子だって早めにトレーナーを持てる方が良い事は多い。だから教官たる俺としては、今受け持っている全員をトレーナーからスカウトさせるくらいの勢いで、今日まで指導してきた。
「集まったな。それじゃあミーティングを始める。時間も無いし、ストレッチをしながら聞いてくれ」
「「「はいっ」」」

ミーティングの内容は多岐に渡るが、総じて行うのは彼女らの精神を安定させる事だ。

此処にいるのは、確かにトレーナーにスカウトされなかった子達だ。その事実は変えようもない。

しかしだからと言って、それがレースに勝てなくなる要因には成り得ない。彼女ら一人一人には長所があり、短所がある。伸び代がある。そして何より、トレーナーに選ばれずとも諦めず、ここまで俺の指導についてきただけの気概がある。

それを披露出来れば、彼女らにだって十分スカウトのチャンスは残っているはずだ。俺はそう信じている。

『連絡します。選抜レースに参加する方は参加登録の為、受付にご集まり下さい。繰り返します。選抜レースに参加する方は……』

ミーティングも終わりに差し掛かり、丁度いいタイミングでアナウンスがかかる。

「……よし、時間も時間だ、最後に一言。……念押しになるが、順位や周りに惑わされず、全力で走ってこい。下手な策略は殊スカウトの場においては逆効果だ」

「「「……」」」

「ありのままの自分を、皆に見せつけてやれ！」

「「「……！はいっ！」」」

「よしっ、行ってこい！」
「「「はいッ!!」」」
気合十分。うん、いい顔だ。
当然、緊張はあるだろう。だがそれでも、彼女らにはそれを上回って余りある自信がある。スカウトされなかった間も絶えず努力し続けて身に着けた、純粋な自分への信頼を。まだ入学してきて数日の新入生には無い経験を。
「行ってこい。そして願わくは、俺の下になぞ帰ってくるなよ」
受付へと向かう子達の背中に届かないよう、俺は小さく呟いた。

■□■□■□

既に日は落ち、選抜レースの為に設置されたゲートはトラックの脇に一時的に寄せられていた。
そしてそのターフから少し離れた、本校舎の真横。街灯が並び、濃紺に染まる景色から切り取られた様に白く照らされたベンチに、俺達はいた。
「ではまた、後日改めて」
「ええ。詳細な資料は正式に引継ぎが決まった時に渡します」

「よろしくお願いします。……さあ、行こうか」
そう言って俺の前から立ち去るのは一人のトレーナー。そしてその横には教官として俺が受け持っていたウマ娘の内の一人。
「今までお世話になりました、紫月教官！」
「ああ。新しいトレーナーの下でも、しっかり頑張れよ。陰ながら応援しているから」
「はい！」
お辞儀を一つ。そのまま俺に背を向け、パタパタと人間で言う所の小走りで新しいトレーナーの隣へと向かう。
少しずつ小さくなっていく背中を見送った後、近くの自販機からコーヒーを購入する。勿論微糖だ。苦くないくらいが丁度いいんだよ。
「ふぅ……」
選抜レースが終わり、俺の受け持っていた子の内、これで合計六名がトレーナーによってスカウトされた。そして今しがた俺の下を巣立ったのは二人いる高等部所属のウマ娘の内の一人。駿川さんの策略により途中何度か担当を外れたこともあったが、それでも中等部一年の頃からの付き合いだ。過去何度も選抜レースでスカウトされなかったが、それでも諦めずに努力するそのひたむきな精神には幾度となく心を動かされた。

そして今年の選抜レースにて彼女は見事スカウトされるに至ったのだ。俺の中にだって感慨深いものが生まれてくる。少し寂しくなるのは否定しないが、それでもスカウトされたその場で嬉しさのあまり泣き崩れる彼女と、そして今しがた見せてくれた満面の笑みの前ではそんな感情ちっぽけなもんだ。今の俺は素直に祝福の気持ちに溢れていた。

だが、ずっと喜んでいられるわけではない。六名がスカウトされたという事は、逆に言えば十名以上はスカウトされなかったのだ。

まだまだ選抜レースの期間は続くし、選抜レースが終わってもスカウト自体は何時でも自由だ。別に今日スカウトされなかっただけで残り一年教官の下での鍛錬が決定するわけでもない。

だがそれでも今を逃せば、ベテラントレーナーからスカウトされる機会はほぼ皆無となるのに違いは無かった。選抜レース期間の終わりになってまだ残っているトレーナーは、スカウト経験の浅い新人か、スカウト戦争に敗北した中堅が多い。それに選抜レースは年四回開催されるとしても、新入生がいる分春が一番の大舞台だ。ベテランの下に行けるチャンスは今日を含めてあと三日といったところか。

まあそれでも、スカウトされるならばそれだけで同じ世代の中でも平均よりは上の実力を持っている、或いは持つと見込みがあるウマ娘なんだけどね。

スカウトされなかった子達は、取り敢えず今日はそっとしておく。だがフォローは絶対に忘れない。俺にさえ見限られたと勘違いすればいい気分はしないだろうから。

「メール……いや、電話の方が確実だな」

最初に電話を掛ける相手はやはり、俺が受け持っている二人の高等部のウマ娘の内のもう一人。彼女とも彼是三年の付き合いだし、高等部になってスカウトされなかったダメージは痛いほど分かる。残りの選抜レースで全力を出してもらう為もあるが、単純に心配だったのだ。

ベンチの横に飲みかけの缶コーヒーを置き、スマホを取り出す。そしてそこから彼女のアドレスに電話を掛ける。

Ｐｒ『ガチャッ』

え、早くない？ワンコールもしない内に出たんだが？

『もしもし、紫月教官？どうしたんだい？』

「ああ、いや……」

きっとさっきまでスマホを触っていたのだろう。うん、そうに違いない。

『それはそうと、後ろを見てくれないかな？』

「ん？後ろ……？」

促されるままに後ろを振り向く。

果たしてそこには、スマホをスピーカーモードにしているウマ娘の姿が。
「ッ！」
「やあ、紫月教官。奇遇だね」
「脅かすなよ……トキノメグル」
トキノメグル。彼女こそが俺の担当する二人の高等部のウマ娘、そのもう一人だ。
レース中のキリリとした目付きは無く、赤紫色の柔らかい瞳が俺を捉える。すまないね、と口では言っているが、その悪戯心満載のニヤニヤした顔を見るとどうにも信じられないな。……まあそれも可愛げがあるんだけど。
「全く……まあ元気そうでよかったよ」
まあ、一度や二度スカウトされなかったくらいで調子を落とす程、彼女は子供では無い。
彼女は基本的に冷静且つ温厚な振る舞いをしている。が、レース時は別だ。真っ直ぐにゴールを射貫くその目には他者を圧倒する威圧感がある。流石生徒会役員と言ったところか。
だが、それ故に少し気がかりだったのは、今日のレースではその威圧感が薄かった事。緊張はあまりしていなかったみたいだし、何かあったのだろうか。

「どうしたんだ、今日のレース？もしかして足の調子が悪かったのか？今は大丈夫そうだが……」
「ん？足は頗る快調だけど、どうしてそう思ったんだい？私としては全力で走ったつもりなんだけどな」
「なら良いんだが。一着も取れてたし速さは申し分無かったんだけど、何だか普段の君と少し違って見えたから」
「……！そうかい……ふふっ」
　ん？何故そこで嬉しそうに頬を緩めるんだ？
「普段はもっと鬼気迫るというか……その姿をこの三年間見ている身としては、スカウトしない手なんて無いんだがなぁ」
「そ、そんな……照れるじゃないか……」
「ほんと、何で他のトレーナーはスカウトしないんだろうな。こんなに凄い子なのに……」

「……は？」

え？何？今その威圧感を出されても困るんだが？
「紫月教官は」
「私にトレーナーが就いたら」
「嬉しいのかい？」
「答えて？」
「ねえ」
「ねえ」
「ねぇってば」

……怖っ。
何だ？地雷を踏んだのか？……分からん。一体今の言葉のどこに彼女を怒らせるフレーズがあったのか、さっぱり分からない。
「それは……やっぱり、嬉しいよ」
「それは教官としてかい？」
「いや、俺自身としてだ。もう三年の付き合いだし、君の頑張りをよく知ってるからこそ、君にはスカウトされてトレーナーを持って欲しいんだ」

「ふぅん……そんな事言うんだ」
何故更に機嫌が悪くなったのだろうか。誰か教えてくれ、飴ちゃんあげるから。
「やっぱりそうだね。うん。出来れば気づいて欲しかったけど、仕方ないよね。これはもう、分からせるしかないよね？」
「まっ、待ってくれ！気に触ったなら謝る。だから一旦落ち着こう、な？」
「謝罪は要らない。何が悪かったのか分からないんじゃ、反省なんて出来っこないんだから。私が欲しいのは、反省した後の君が取るべき行動だけ」
「うぐっ……」
「だから何がいけなかったのか……その身に刻み込んであげる」
ジリジリと迫り来るトキノメグル。それに合わせて後退していく俺。だがそれは背中に当たる壁の冷たさによって終わりを告げられる。
後退は封じられた。それでも彼女は止まらない。であれば彼我の距離が縮まるのは、必然。
俺の耳の真横に、彼女の掌が叩きつけられる。よもやこの歳になって壁ドンを経験するとは思わなかった。どうやら胸がドキドキしてしまうのは本当らしい。……おまけで変な汗も止まらなくなってきたけど。
視界一杯に広がる彼女の顔。普段と色が違うその瞳に、ドンドン意識が吸い取られて

いくような……

ドギャァン!!

「……へ？」

「……」

轟音。何か硬いものが、容赦なく破壊された音。

その音がした方向に目を向けると……

「……紫月トレーナー。話があります」

大きく罅の入った壁の横に、笑顔の抜け落ちた駿川さんが立っていた。

……うん、逃げたい。

■□■□■□

「ねぇ？何だったんですかあれ？明らかに生徒と教官の距離感ではありませんよね？もしかして何か疚しい事でもする気だったんですか？いけませんよ？そんな事許されて

いいはずがありませんよね？それによりにもよってまたあの子ですか？私前にも言いましたよね？教官としてもずっと同じ子を担当するのは好ましくないって、ねぇ？私、ちゃんと言いましたよね？じゃあ何であの子と一緒だったんですか？百万歩譲って一緒なのは仕方ないとして、どうしてあんなにくっついていたんですか？そんなに近づく必要なんて微塵も有りませんよね？何でなんですか？もしかして浮気ですか？そんなの絶対に許しませんからね？ねぇ、どうしてそんなに黙っているんですか？もしかして図星なんですか？本気であの子と特別な関係にあるんですか？違いますよね？そんな事、万に一つもあり得ませんよね？じゃあはっきりと否定してもいいじゃないですか。違うなら何とか言って下さいよ、ほら、ほら、ほらほらほらほらほら……」

本日二度目のＫＡＢＥＤＯＮ。世の皆さんはこれで恋に落ちるらしい。ふむ、なかなか強靭な精神をお持ちのようで……少しでもいいからその見事な胆力を俺に分けてほしい。

「……」

……いかん、現実逃避はよそう。彼女が滅多に見せない前掻きをし始めた。

「勿論唯の教師と生徒の関係ですよ。それ以上もそれ以下も有りません」

「じゃあ何であんなにくっついてたんですか？」

「それが、良く分からないんです。どうやら俺があの子の機嫌を損ねてしまったようで、

いきなり詰め寄って来ました」
「ふぅん。それで？」
「後は御覧の通り、そのまま詰め寄られて壁ドンをされ、何故か顔を近づけられていた次第です。誓って疚しい事は何も」
　真っ黒の瞳のまま無言で俺の顔を凝視する駿川さん。裁判長から判決を言い渡される被告になった気分だ。それも十中八九有罪が確定している犯人の。
「……はぁ」
　どうやら先程までの掛かり状態は幾分和らいだようだ。その証拠として瞳孔が開き切って真っ黒だったその瞳は光を取り戻し、限界まで引き上げられた瞼は降りてきている。その代わり口を小さくへの字に曲げ、加えてジト目で俺を睨んできているが。
「……不本意ですが許してあげましょう。嘘はついていないようですし、何より手を出したのはあちら側ですからね」
「ありがとうございます」
「それに私も……忙しさについ油断していました。これからは気を付けます」
「油断……とは？」
「それは勿論貴方の心配ですよ。メールや電話は勿論の事、ＧＰＳチェックに盗聴……まあ色々です」

「頼むから永遠に油断してて下さい」
　多分ＧＰＳ機能を持つアプリケーションソフトはトレセン学園から支給された仕事用のスマートフォンに搭載されているのだろう。勿論俺のものにだけ、駿川さんが勝手に。やっぱ職権乱用って悪だわ。
「まぁ、誤解が解けたなら何よりです。俺はもう行きますね」
「何処にですか？」
「先程居たベンチにですよ。あの場であなたが有無を言わせず俺を引っ手繰ったんですから、まだ彼女がそこに残っているかもしれません」
「……反省してます？」
「様子を見るだけですよ。彼女が帰っていたらそれで大丈夫ですし、残っていても軽くお話をする程度です。もし気になるようであればついて来てもらっても構いませんよ」
「ええ、じゃあそうさせてもらいますとも」
　先程駿川さんに引きずられて通った道を、今度は自分の足で歩いて引き返す。既に日は落ち切り、辺り一面は黒で塗りつぶされている。街灯とまん丸に太った月だけが、そこに色を与えている。
「こうやって一緒に夜を歩くのは久しぶりですね」
「そうですね。ここ最近はお互い忙しかったですし」

「ふふっ……夜のターフを見ると、あの頃を思い出しますね。丁度これくらいの時期に、ダービーに向けて走っていたあの頃を」
「何しろ無敗でしたからね。昼間ターフに行けば周りの子達からよく勝負をふっかけられて……ダービー前は情報を出来るだけ与えたく有りませんでしたから、結局夜にこっそりターフに行くようになったんでしたっけ」
「私としては別に情報を漏らしても良かったんですよ?それでも勝ってみせますし」
「……情報の面も有りますが、そうやって偶に煽るのも昼間を避けた理由ですよ。特にあなた、イツセイには容赦有りませんでしたし」
「それは……あの子がカルガモ親子の様に私の後ろをくっついて来るもんですから、つい構いたくなってしまって……」
イツセイは彼女と同じ世代のウマ娘であり、正に時代の王たるウマ娘だった。
勿論敵無しという訳ではなく他にも速い子はいたが、一時期の間彼女は間違いなくその時代の頂点たる存在だった。そしてその肩書に相応しい成績を収めていた……はずだった。
……トキノミノルという、一種のバグがいなければ。
彼女の成績はある意味で無敗だった。トキノミノル以外の全てのウマ娘を蹴散らし、最終結果を見れば一時期はイツセイが出るレースはトキノミノルがいなければ一着、い

れば二着となってしまっていた。それ程までに彼女は強かった。
だがどうしても、連勝を重ねることが出来なかった。全ての元凶は時代の頂点などという器には収まりきらないバケモノが相手だったから。文字通り『相手が悪かった』のだ。
だが仲が悪かった訳ではなく、むしろいい友人同士だった。それこそイツセイがトキノミノルに勝つために、事あるごとに勝負を吹っ掛けるくらいには。そしてその勝負を受け、その全てを返り討ちにしていた彼女が、他の子には嫌味に聞こえるような煽りをするくらいには。
「俺の記憶の中のイツセイ、全部悔しそうな顔しかしてないなぁ」
「もしかしたら私にとってはそれが新鮮で、つい煽ってしまったのかもしれませんね。負けた事が無いとやっぱりその悔しさが分からないですから」
「……素で言ってるし、しかも事実だから恐ろしいんだよなぁ」
今この場にイツセイがいたら発狂してそうだな。まあその発狂も既にご愛敬なんだが。
「本当、懐かしいですね……ふふっ、それに変なのも思い出してしまいました」
「変なの？」
「貴方のプロポーズですよ♪『あなたが欲しい』って……熱烈でしたね♪」

「ちょっ、その後直ぐに訂正しましたよね!?」
「でも言いましたよね?覚えてますよ?この耳ではっきりと。忘れてもあげませんし、訂正なんて認めませーん」
「うぐっ……昔の自分をぶん殴ってやりたいよ……」
　なんてこと口走ってくれたんだ。あの頃はウマ娘による拉致事件なぞ想像すらしていなかったピュアな時期だから、警戒の「け」の字も無かった。本当に、今から思えば危なっかしい事をしていた。
　隣でいつもの三割増しでニマニマしている緑の悪魔……もとい駿川さんから目を逸らし、ようやく見えてきた目的地に目を凝らす。暗くてはっきりとは分からないが、少なくとも街灯が当たっている場所には彼女はいなさそうだ。
「どうやら、帰ったようですね。良かった、もしこんな時間まで待っていたら申し訳なかったですし」
「寮の門限も近いですからね。当然です」
「一応メールは送っておきますかね」
「心配性ですねぇ」
「これが普通ですよ」
　これで万事解決とまでは行かないが、目下の心配事は無くなったか……いや、まだ

あったわ。やべっ。
「すいません、他の子達に電話するのを忘れていました。失礼します」
「他の子達って、スカウトを逃してしまった方々の事ですか？」
「ええ」
「本当に……心配性ですね」
呆れ半分で、でも微笑みながらこちらを見つめてくる駿川さん。やっぱりウマ娘に優しいのは変わらないようで、俺が彼女の話を遮って電話するのだって快く許してくれている。
駿川さんに失礼して近くのベンチまで行き、電話のコールを始めると……
「あ、電話が終わりましたら今日は飲みに行きませんか？」
「え？ちょっと急に何を――――ああ、もしもし……」
「あら、断らないという事はＯＫなんですね？ふふっ……確か貴方はお酒弱かったですよね？貴方の介抱……楽しみにしておきますね♪ふふふふっ……♪」
「――――――」
この人俺が電話して返答できないのを分かってて許したんだ。やっぱりウマ娘には警戒しておかないとだね。

バックストレッチ

夢というものは記憶の整理だと俺は思う。

過去に起こった事、或いは最近起こった印象深かった事……はたまた寝る前に見ていたテレビの事など、夢の内容は実に雑多。

そして何故かわからないが、悪い夢というものは決まって現実にベッドの上で横たわっている自分の寝つきが悪い時に見るものだ。

息が苦しい時は溺れる夢。歯軋りしている時は、歯が折れる夢。冬場に毛布から腕が出て冷えてしまった時は……色々あったかな。体の異変と夢の内容は必ずしも相関があるものでは無いけれど、悪夢を見る時は決まって寝つきが悪くなる原因があった。少なくとも俺は、と言うのが前提にあるが。

……だからこうやって過去のトラウマが蘇るのはきっと、昨日駿川さんと行った居酒屋のせいだと思う。

恐らく現実にいる自分は酔いで気分が悪くなっているはずだ。息苦しくなったか、あ

るいはお酒で温まっていた体が急速に冷えているのかもしれない。
だが悲しいかな、夢の中で感じる時間と現実で過ぎる時間はズレがある。現実で体が悲鳴を上げ始めてから起床に至るまでの数秒が、夢の中じゃあ数時間に膨れ上がる事もある。
現実での苦行はほんの数秒。だが俺は今からきっと数十分間、地獄を見るだろう。

『さあ――――日本ダービー、まもなく始まります！』
君が東京優駿で足を壊した、あの瞬間を。
俺は今から何も出来ないまま、呆然と見続けるだろう。
そして何より――――あの時何か出来たはずの自分が、なんにも出来ないまま項垂れるその姿を。その過去の自分を。憎むべき、加害者を。
俺は罰する事さえ出来ないまま、見続けるだろう。

■□■□■□

Ｇ１の一角、東京優駿。またの名を、日本ダービー。
先月皐月賞を掻っ攫ったトキノミノルにとってはクラシック三冠達成への折り返し

であり、事実上の峠でもあった。
「最も運のあるウマ娘が勝つ」――――東京優駿はそう噂されているのだが、だからと言って神社にお参りをしに行けば勝てるほど簡単なレースでは無い。皆、自分の足で勝ちに来ている。
「そろそろ、ですね」
「ああ……そうだな」
だからこそ、俺は信じている。トキのダービーに向ける熱意を、努力を、実力を。
トキは間違いなく今が最高のコンディションだ。
ウマ娘であろうが人間であろうが、女性の肉体の成熟は男性のそれと比べるとほんの少し早く、ウマ娘のレース競技における肉体の全盛期は基本的に中等部三年～高等部三年の間で横這いに存在している。つまり逆を言えば、トレセン学園卒業後はゆっくりではあるが肉体は衰えていくのだ。
しかしそれ位の誤差は日々のトレーニングと経験の前では微々たるもの。トレセン学園卒業後でも活躍するウマ娘も当然存在する。肉体がどうこう言うよりトレーニングを重ねる方がよっぽど建設的だ。
だが、それでも――――そうだとしても、トレーナーとしては語らざるを得ない。今の彼女こそが今までで最高の状態である、と。

肉体は全盛期を迎え、トレーニングも積み重ねてきた。それこそこれから先の菊花賞の場で、今以上に進化した彼女の姿を想像できないくらいには。
「流石に少し、緊張しますね。夢にまで見たダービーの舞台ですから」
「多少の緊張感は大事だが、堅くなりすぎるなよ」
「ええ、分かっていますとも」
彼女の肉体は嘗て無い程に仕上がっている。なら今すべきことは、その肉体を最大限活用するための準備だ。その為にも彼女の心に寄り添うのが大事だ。
「これが緊張感から来るものかは分からないんですけど……少し、不安なんです」
「何がだ？」
「原因が分からないんです。ただ何となく、嫌な予感がするというか……」
「……ごめん、触るぞ」
最終チェックに彼女の足を触診するために、その場で膝立ちになる。彼女としても既に慣れてくれたらしく、無言で足を前に出してくれる。
「……筋肉に異常はない。炎症も無いし、肉の強張りや筋のズレも無し。……骨格にも異常はないな。骨盤のズレ、膝関節の定位及びねじり、足首の定位とねじり……特に異常はない」
「そう、ですか」

　この触診の意味は彼女の無事を確かめる事というよりかは、これを聞いて彼女の不安を和らげるのが目的だ。とは言っても、それもあまり効果が無かったみたいだが。
『さあ、今レースのウマ娘達が入場します！』
　放送席からの催促により、トキは足を戻して外の方を見る。彼女がこの地下バ道を抜けて日光を浴びれば、俺はもう彼女にアドバイスをする事は許されない。
「では……行きますね」
「ッ……」
　クラシック三冠の峠、東京優駿、無敗記録……数えればきりが無い程、彼女の緊張の原因はそこら中に転がっている。きっとそこには彼女の不安の種も必ずあるはずだ。
　でも、それが何かが分からない。
「トキノミノル」
「……？どうしましたか、トレーナーさん？」
　この短時間で、君のその不安を取り除く事は俺には出来ない。だが自分の無能を呪うのは後でいくらでも出来る。今この瞬間を費やして為す程の価値はそれには無い。
「信じているぞ」
「……！」
　不安は取り除けない。だからこそ今俺が掛けるべき言葉は、きっとこれだろう。

「……ええ、貴方の信頼……ちゃんと受け取りました」
今の俺の気持ちを、ぎゅっと一言に圧縮して、君に捧げよう。
「さあ――――行ってこい！」
「はいッ!!」
他の誰にも負けない、溢れんばかりの信頼を。
あなたに……勝利を。

■□■□■□

『さあ――――日本ダービー、まもなく始まります！』
軽快な吹奏楽器が奏でる音と共に、会場のボルテージは最大にまで跳ね上がる。
ターフ上にいるウマ娘達が自身に割り当てられたゲートに入っていき、今か今かと目の前の扉が開くのを待っている。
「晶！悪い、遅れた！」
「！……もうすぐゲートイン完了しますよ！」
俺は今観客席の中でも最前列、しかもゴール手前の席にいる。一般客がこの席を取ろ

うとすればかなり早い時間からチケット売り場に並んでおかなければならない。
なら何故俺が此処に居られるか。それは偏に俺がトキノミノルのトレーナー……もとい、今回のレースにおける出走バのトレーナーだからだ。
だから後ろから声を掛けてきた先輩や同期の人達も俺と同じく、今ゲートに入っているウマ娘の担当達だ。
「おうおう、今日は勝たせてもらうぜ！」
「な～に言ってんすか！トキノミノルの無敗記録を終わらすのは、うちの担当バっすよ！」
トキノミノルは無敗。だからこそ今こうやって1番人気のウマ娘として紹介されてゲートに入っていくし、既にゲートに入っているウマ娘達からは燃え上がるかの様な熱い視線を向けられている。
そしてその子達の担当トレーナーもまた、俺に向けて熱い視線を向けてくる。傍から見ればむさ苦しい先輩に絡まれて可哀想な後輩に見えるだろうが、これが案外心地よいのだ。レース前のこの得も言えぬ高揚感の前には、このむさ苦しさが似合ってる。
「余裕そうだな、晶」
「少し違いますよ、先輩。俺はただ信じているだけです。今日もあいつが一着を取ると」
「ふっ……それでこそ倒しがいが有るってもんだ。だが俺もうちのイツセイを信じてい

る。あいつのトキノミノルに対する執着は誰にも負けていない」
「先輩には悪いですが……トキノミノルは負けませんよ。今までのあいつとは一味違いますからね」
「……生意気で糞可愛い後輩にはお灸を据えてやらんとな。『レースに絶対は無い』って事を教えてやる」
「そのお灸、丁重にお返しさせてもらいますよ」
　悪いが先輩でもこれは譲れない。トレーナーという人種は他の誰よりもウマ娘を客観的に捉えることの出来る人間であり、それでも尚他の誰よりもウマ娘を主観的に見てしまう変人だ。例え自分の担当バと敵の担当バの力量や才能の差を理解していても尚、自分の担当バが負けるなどと微塵も思わない。
　……だからこそ、正々堂々と言えるのだ。自分の担当バこそが最強だと。
『各ウマ娘、ゲートインが完了しました！』
　放送席からの声に、俺達は一斉に固唾を飲む。否、会場にいる全ての者が今この瞬間だけはその意識をゲートに向け、一様に口を噤む。
　時間にすればほんの数秒。だがゲートが開くまでのこの数瞬は何度場数を踏んでも異様に長く感じられ、逆に約二分半にも及ぶレースは一瞬の内に終わっている。
　トレーナーである俺達でさえこう思っているのだ。今まさにゲートの中にいるウマ

娘達は……どれ程の緊張と高揚に包まれているのだろうか。
喧騒が止み、一瞬出来上がる静寂。

その静寂を切り裂いたのは、同時に開いた扉同士の接触による、軽い金属音。
そして、最初の一歩を踏み出し、地面を踏みつける、その鈍い打音。
『スタートしましたっ！』
『十八人全員、綺麗に出ましたね』
「よし……」
「よっしゃ！いいスタートだ！」
「落ち着いているな。先行に惑わされずにいい位置取りが出来そうだ」
スタートはまずまず。不安があると言っていただけあって確かに好スタートとは言い難いものの、これ位はまだまだ大丈夫だ。あいつはパワーが桁違いだし、バ群に呑まれても複数人の結託された妨害でない限り大体突破できる。
『先頭は九番――――、続いて十四番の――――、少し離れて十八番の――――、そしてその後ろに今日のダービーの一番人気、二番トキノミノルが控えています』
『おや、今日は先頭を譲る形で来ましたね』
トキノミノルには絶対的に得意な戦術は無い。が……あいつはいつも逃げウマ娘だ

と言われている。その理由は単純にして明快、他のウマ娘と違ってスピードの絶対値が違うからだ。

あいつはいつも最初は先頭に位置取るが、別にそれが得意な戦術という訳でも無く、お気に入りという訳でも無い。逃げウマ娘と並走しながら足を蓄え、そして最後に上がってきた差しウマ娘を直線で引き離す。ただ単純に「速い」だけなのだ。

そしてその単純な事が、殊レースでは何より恐ろしい。

『……後方に六番イツセイ、そのまた後方には十一番――――が……おっと、二番トキノミノル、第一コーナー前で早くも上がってきましたね』

『ははは！彼女からした自然に上がっただけなのかもしれませんね！』

多分それで合っている。コーナー前にギアを上げる必要性が低いからこそ、あれは自然に上がっただけで間違いあるまい。

『さあ、先頭は依然として九番でその後ろをしっかりと十四番がマークしています。そしてすぐ後ろには上がってきた二番がついており――――いま第一コーナーに入りました』

先頭集団が第一コーナーに入る。

左回り、向心力を打ち消す仮想の遠心力に抗い、上体を左にやや倒す。

そしてその軸足になる左足に、体重がかかり――――

パキッ

聞こえるはずの無い音が、嫌な位耳に響いた。

■□■□■□

「ッ――――――」

きっとこれは、幻聴なのだろう。だがそれは虚構であることを意味しているのではなく、俺の見たその光景が一瞬で作り出した一種の確信が、架空の信号となって俺の五感に警告を出したのだ。

外見上に変化は殆ど無い。それどころか……彼女はどんどん加速していく。コーナーに相応しくない程に、加速していく。

彼女は……笑っていた。薄っすらと浮かべる笑みじゃない。今まで一度も見たことが無い程、酷く口角を釣り上げて、笑っている。

それがどうしようもなく……不気味だった。

「止まれぇぇェエええエええッッ!!!トキィいいィイイッッ!!!」

確定だ。骨が折れたのだ。

箇所は左足の脛骨の上部、腓骨は罅に収まっているくらいか。

そして骨折による力の分散を庇って骨と全身を支えている左足の筋肉は、いつも以上に酷使されている。

まずい。まずい。まずいッ……!

何故あいつは止まらない?今も尚左足には痛みが駆け巡り、それを無理して支えている筋肉は悲鳴を上げているはず。それにこのまま走れば間違いなく悪化する。今は単純骨折と罅で済んでいるが、このまま走ればいつ筋挫症を起こしても不思議ではない。最悪一気に関節が破壊され、選手生命が断たれるかもしれない。

ダメだ。それだけは絶対に避けなければならない。

「おい、どうしたんだ、晶!いきなり『止まれ』だなんて!」

「観客もいる。一旦落ち着け、な？」

……は？

見て分からないのか？あいつの足は今……折れているんだぞ!?

「よく見て下さい！あいつの左足、さっきのコーナーで折れたんですよっ！」

「なっ……いや、特段負傷してる風には見えないが……」

「そもそも骨折すれば力が逃げるし、ああまで速く走れる筈が無いんだがな……見ろ、減速するどころかギアを上げてるぞ」

「ッ……！」

既の所で喉に迫り上がってきた暴言を飲み込む。そんな事してる暇は無いんだ。先輩方を頼れないなら、自分で何とかするまでだ……！

『さあ、第二コーナーを曲がり切って先頭に躍り出た二番、トキノミノル！速いですねぇ！』

『あの速度でコーナーを回るとは、足の強靭さと技術の高さが伺えますね』

『１０００メートルのタイムは５９．８！一分を切ってきました！』

『ややハイペースですね。ですが彼女なら最後まで『保たせて』きますよ』

絶え間無く聞こえる実況の中からトキの事だけを切り取って耳に入れる。……ちっ、

もう１０００メートルか。

バキッ

「……ッッ!!」

不快だ。神経を逆撫でするかの様な、その歪んだ響きが頭から離れない。不快だ。実に不快だ。

「おい、何処に行くんだ！」

「放送室ですよ！マイクを借りに行くんです！」

「はぁ!?今から行ってもそこに着く前にレース終わっちまうぞ！」

「……なら、ターフに出てやるっ……！侵攻妨害でレースが中断すれば、あいつも止まるだろ！」

「落ち着け！あそこで走っているのはなにもお前の担当だけじゃねぇんだぞ！」

「知るか！責任は全部負ってやるから、先ずはあいつをと止めるのが先決だろうが！」

「だから落ち着けって言ってるだろうが！」

「五月蝿い！邪魔をするなッ！」

「……少し、静かにしろ」

……頭に上りきった血が、少し下がる気がした。

声をかけたのはこの中でも最年長のベテラン、そして今もターフに居るイツセイの担当トレーナーだった。

「晶。トキノミノルの足は、折れているんだな？」

「間違いなく」

「そうか。丸二年以上欠かさず見てきた担当が言うのだ。なら間違いは無いだろうな」

「だったら今すぐにでも……！」

「ターフを見てみろ」

「……は？」

先輩が指さす方には、既にバックストレッチの半分以上を通過したトキが。

『速い速い！トキノミノル、既に何バ身開いているのか分からないほどです！』

『これは稀に見る『大逃げ』ですね。仮にこのペースが保つなら、とんでもないタイムが出ますよ』

「あいつはもうここで『終わる』腹積もりだぞ」
「なっ……！有り得ないっ！」
終わる。それだけ聞いて意味が分かってしまったのが恐ろしい。
……いや、それを分からせる彼女の走りを見て、何処か納得している自分がもっと悍ましい。
「あいつにはまだ菊花賞が有るんですよ！それだけじゃない！あいつならシニア級だってやって行ける！例えここで無敗記録が途切れようとも、あいつにはまだまだ未来が有るんだ！」
「晶。辛い気持ちは痛い程分かる。でもそんな事は他の誰でもない、彼女が一番分かってるんだ。それでも、そう分かっていて尚、トキノミノルはターフを駆けているのだ」
「ッ……」
「気の毒だが、一度走り出したウマ娘は止められない。今のレース制度上、トキノミノルが自主的に止まらない限り俺達は見ているしかないんだ」
認めたくない。死んでも認めたくない。
ここで終わるはずじゃなかったんだ。あいつはもっと、高みを目指せる。俺達はもっと速くなれるんだ。
嗚呼――――トキ、それでも君は走るのか。この先のバ生を棒に振ってまで、このレー

スに勝ちたいのか。

『トキノミノルたった一人が第三コーナーに入ります！……えっ？』

『あの速度でコーナーは、かなり負担がかかるはずですが……』

ああ、そうだろうな。足の負担は計り知れないだろうな。

けどな。もう取り返しがつかないとこまで来てるんだよ。

異常な速度でコーナーに入り、その速さを殺さないためには体を左に大きく倒さなければならない。軸足にかかる負担は大きくなる……というか、あそこまで上体を傾ければバランスを維持する事すら至難。少しでも怯んで速度を落とせば体を支える遠心力が弱まり、直ぐに足を滑らせて転倒、間違いなく軸足は折れるだろう。そうでなくとも足首や膝関節に掛かる力は相当に大きくなり、高確率で負傷する。

普通ならこんな無茶をする必要はない。けどたった一つ、この暴挙を暴挙としてみなされないシチュエーションがある。

それが今。既に足を壊しこの先のバ生を放棄した今なら、通常なら曲がらない角度まで足首を捻り、膝をねじ切り最大効率で曲がりきることが出来る。当然、途方もない痛みは伴うだろう。

だが……それでもトキはその笑顔を崩さない。否、その笑みは更に深まる一方だ。

それが余計痛々しさを際立たせる。素人は気付かないかもしれないが、その道に携わ

る者の目には流石に違和感が映っているだろう。足を異様なまでに捻り切り、負担が一層増した状態で尚、笑顔を浮かべる彼女に。

ピシッ

パキッ

ギリッ

ブチッ

バリッ

ボキッ

俺の耳が、幻聴で埋まる。
亀裂が走り、広がる。折れた断面がガチガチと鳴り合い、こぼれ出た破片が骨を包む肉に突き刺さる。軟骨は擦り切れ、筋は伸び切り、ブチブチと繊維が捩じ切れる。ゴキリ、と再度骨が弾ける。
彼女が力強く大地を踏みしめる度に、その幻聴が俺に訴えかけてくるのだ。
――もうトキノミノルの足は限界だ
――これ以上走れば、二度と復帰出来なくなるぞ
――今すぐ止めさせろ

でも、もう止まらない。止められない。
彼女がゴールへと駆ける一歩一歩が、着実なる『破滅』へ伸びていても。
それが手に取る様に分かっていても。

「止めてくれ……」

掠れた声で懇願するしか、俺には出来なかった。

『二番、曲がり切りましたね……』
『いや……すごいですね』
たった一人、第四コーナーを曲がり切って直線に入る。残りは上りの三ハロン。
目に見えて明らかなハイペース。だがそれでも更なる加速をその折れた足で生み出していく。
『後方、第四コーナーを曲がり切りましたが……何バ身離れているか、見当もつきません』
後方で湧き上がる歓声。現状はまだ『大逃げ』と言われて納得する範疇だろう。彼らの目にはここから上がってくる後方から逃げ切れるか否か、という風に映っているのかもしれない。
だが、それは大きな間違いだ。
『さあ、直線に入り後方の順位争いが激しくなってきました！一番――――、十二番――――、六番イツセイ、勢いよく上がってきています！このまま先頭を捉え切れるかーーーーえ？ど……どういう事でしょうか……？』
『差が……寧ろ開いてる』
『こんな事、有り得るんですか？』

『……』

トキはここから『上げて』くる。それも生半可な差しでは逆に差が開く位には、速く。

一見スタミナが桁違いのように思えるかもしれない。だがそれも間違い。

真相は至って単純。然程スタミナを消費せずとも、トキは十二分に速く走れるのだ。本当にそれだけなのだ。

圧巻。その一言に尽きる。心の底から称賛できる。

「……」

だからこそ、己の矮小さが身に染みる。君が壮絶な苦痛に身を焼かれながら、それでもなお先に進む事が出来るというのに。俺は君の足が折れたその時から、なんにも出来ていない。

「晶？」

「席を外します。トキを、迎えにいかないと」

「分かった、面倒ごとは俺達に任せとけ。お前はトキノミノルの下に行ってやれ」

「ありがとうございます」

席を立ちあがり、ふらふらとした足取りで歩いていく。向かう先はゴール地点。

何も出来なかったんだ。ならば何かを成した者を称賛し、支え、そしてトレーナーとして全てを受け止める。それ位しか俺に出来る事は残されていない。

依然として幻聴は俺の頭の中を掻き乱している。それこそ不快感で思考が全て塗りつぶされてしまう位には。

……もう、俺に出来るのはこれしかない。

『これは一体……確かに、後方は追い上げてきているはずなんですが』

『異様……という他ありませんね』

ハロン棒が示す数字は4。にも拘わらず、未だ先頭と後方の差は縮まらない。

『さあ、後方を抜け出してきたのは六番イツセイ!どんどん追い上げて来ていますが……』

『しかし……この距離を詰めるのは至難ですよ』

イツセイも十分に速い。後方集団から頭一つ抜け出し、尚も加速していくのだ。追い込みのウマ娘もいるにはいるが、トキノミノルがいなければ彼女の一着は濃厚だっただろうな。

『っ!尚も加速する二番、トキノミノル……』

『圧倒的、ですね』

残り２００。それでも差は、大きく開いたまま。

引き離す。まるで磁石が反発するかの如く、追いついてきた二着を寄せ付けない。

駆ける。苦痛を塗り潰す興奮と笑顔を携えて。

駆ける。己の全てを棚に上げて。
駆ける。取り巻く世界を置き去りにして。
駆ける。

駆け抜ける――――

バキッ

――――さようなら

「はああァぁあァあああぁあッっ!!!」
吠える。
最後の一歩。
そのボロボロの左足で。

トキは誰よりも早く、そして誰よりも速く、そこに辿り着いた。

■□■□■□

『二番トキノミノル……他を寄せ付けず、一着でゴールしました……』

憑き物が取れたかのようにその勢いは異様なほど急激に落ちていき、ふらふらと数歩前に出したかと思えば、彼女はその場で足を崩した。……否、崩れ落ちたのだ。

「トキっ……！」

軸足を失い、その場で倒れ込む。

今の制度では、ウマ娘全員がゴールにたどり着くまで誰も邪魔出来ない。出走妨害をした時点で出場ウマ娘は失格扱いにされ、最悪レース自体が無効となる場合すらある。

トキは最後までやり遂げた。最後の最後で俺がその邪魔をすることなど、許されるはずもない。

そう、頭では理解できる。

「ッ……！」

だが、納得できるはずがない。

アドレナリンが止まり、急激に襲ってきた苦痛に顔を歪めるトキ。その場でのたうち回り、折れた箇所を手で抑えるトキ。

生憎……目の前で苦しんでいる担当を前で黙って見過ごしていられる程、俺は大人じゃないんだ。

『――――――』

『――――――』

放送席はトキの事など目もくれず、今も尚レースにいるウマ娘の実況をしている。

こうやってレース終わりに体力切れで倒れ込むウマ娘は腐る程いた。単純に足の疲労や痛みを訴えるウマ娘もいた。

「フ――――ッ……フ――――ッ……」

早く終われ。早く終われ。早く終われ。

トキが倒れた時点で後方集団の先頭であるイツセイは残り１００を通過している。恐らく全員が走り切るまでは多く見積もっても十秒はかかるまい。

その時間が――――惜しくてたまらない。

『――――――』

「ッ！」

悠久に思えたその時間は、実況席から聞こえた最後のウマ娘がゴールする旨を話す声により終わりを告げる。

「トキッッ!!」

「トレーナーさん……」

柵を乗り越え、ターフに降りる。そのまま一直線でトキがいる方へ駆けていく。

「私、勝ちましたよ……凄いでしょ？」

「……ああ、見ていたよ。……だけど先ずはその足だ。きっと先輩が救護班を呼んでくれているはずだ」

「……やっぱり、バレてましたか」

「当然だ、俺はお前のトレーナーだからな。……良かった、解放骨折まではいってないな。足を上げてくれ。負荷が掛からないように、そのまま固定する」

「すいません、トレーナーさん」

「謝らないでくれ。お前は何も悪くない」

「違うんです」

固定する手は止めないが、目線はトキの目に向ける。何が、違うんだ？

「実は……トレーナーさんの声、聞こえていました」

「……え？」
「幻聴かもしれないんですけど、私の耳にはっきりと『止まれ』と。そう聞こえたんです」
「……幻聴じゃない。確かに、そう叫んだ」
「でも私はそれを、無視しました」
「気にしないでくれ。トキは悪くない。非なんて、有るはずもない」
　君が走りたかったから、走ったのだ。このレースで勝ちたかったから、勝ったのだ。それのどこにも悪い所なんてない。
「今日は何故か不安が拭えなくて。きっとレース前から予感していたんです。私はこれ以上速くなれない、と」
「っ……そんな事……」
「でも……トレーナーさんが私を信じてくれましたから」
「……！」
　俺が……信じていたから？
「嬉しかったんです。貴方の信頼が、そして貴方の信頼に応えられる事が」
「へ……？」
「トレセン学園に入ってから私は、貴方に色々なものを貰いました。レースの技術は勿論ですけども、それ以外にも一緒にレースに向けて頑張ったり、お休みには一緒にお出

掛けしたり。色々な経験を貴方から貰いました。沢山の楽しい時間を貴方から貰いました」

「あ……」

「だからこそ――――貴方と一緒に夢に見た、このダービーで……どうしても勝ちたかったんです」

「貴方の信頼に応えるために。貴方に貰った恩に報いるために」

……おれの、ため？

ふと、顔を上げる。

電光掲示板に映し出されていたのは、レコードを示す光。

『２：１９：６』

二分三十秒の壁を誰が破るか、という話で持ち切りだったこの界隈を突き放すが如く、その次の見えない壁である二分二十秒の壁さえも超えてきたのだ。

まさに天が作り上げた傑物。歴代の最高傑作。

「……そうか。俺の為、か」
ならば――その罪は誰にある？

勿論、俺だ。

この日、天が作り給うた最高傑作は、俺の手によって破壊されたのだ。
「トキ」
「……はい」
「ありがとう」
「いえ……そんな」
「それと……ごめんな」
「え？」
「本当に、ごめんよ……」
「……？」

……俺の中で、何かが止まった音がした。

第三コーナー

「……」

目が覚める。

普段は脳の芯まで覚醒するのに数十分を要するのだが、こういう悪夢を見て起こされた後は例外だ。

体を襲う異常なまでの倦怠感、胃の中を這いずり回る吐き気。

「うっ……」

何も考えられないままその場で飛び起き、部屋のトイレに体を滑り込ませる。

「うぇっ……はぁっ、はぁっ……」

トイレの便器に顔を突っ込み、言い様も無い不快感と共に胃を収縮させる。

「おぅっ……はぁっ……」

だが、出ない。吐瀉物が一向に見えてこない。

昨晩は飲酒したせいもあってか普段より食事量は少なめであり、既に昨日食べてものは消化されて腸まで行ったようだ。加えて窓から見える外の暗さを鑑みて、今は朝と呼

ぶには少々早すぎる。恐らく四時半近くだろうか……少なくとも普段朝食を取る時間とはかけ離れている分、胃液の分泌も控え目だ。

「糞っ……」

何も吐き出せない分、不快感はずっと胃の中に残り続ける。いっそのこと吐き出せた方がどれだけ楽だろうか。

「……」

いや……もしかしたらこれは、吐き出してはいけないものなのかもしれない。

全てを投げ捨てて楽になる事なんて幾らでも出来る。それこそトレセン学園を辞めるなりすれば、簡単に。

でも、それじゃあだめだ。それじゃあ罰になんてならない。

トキノミノルの足を壊した罪は、こうやって俺の中に留まっているべきなのだ。のうのうと一人逃げ出して楽になろうなぞ、虫が良すぎる。

「……」

不快感を腹の中に残したままトイレを後にする。部屋に戻って充電器に接続された携帯を確認する。

五時二分。日の出を控え、空がほんの少し暗闇から藍に変わりつつある頃合い。いつもの起床時刻に比べればまだ一時間ほど猶予があるものの、吐き気のせいで頭は強制的

にクリアになった。
今日は昨日に引き続き、選抜レースが開催される。
今年は例年よりも調子が良く、既に三分の一程度は昨日の時点でスカウトを受けた。このままいけば全員がスカウトを受けるのだって夢じゃない。
教官はトレーナー以上にウマ娘との距離感には注意しなければならない。トレーナーを持つことが出来ずに気を落としているウマ娘のやる気を上げる一方、もしトレーナーが出来ても後腐れなく教官の下を去れる位には距離を置く。
そしてこれは複数のウマ娘を担当に持つ中堅以上のトレーナーにも言えるのだが、特定の子に肩入れをするのは禁忌中の禁忌だ。教官なら他のウマ娘からの信頼を失い、トレーナーなら血を見る羽目になる。……冗談でも何でもないぞ？
だから俺も、あまり一人だけを気に掛ける訳にはいかないんだが……どうにもそれが出来ない子が一人。
トキノメグル。中等部からトレセン学園に在籍しており、三年が経過して今年からは高等部なのだが……トレーナーが未だついていない。
だが決して実力不足という訳でも無い。それどころか、正直あの子を一目見た時に俺は素直にあの子を担当にしたいと思ってしまったくらいだ。そしてその勘に狂いはなく、たまに行う併走トレーニングや模擬レースであいつは同年代に対して十分以上に渡

り合えるほどの走りを見せていた。
また素行が悪いという訳でも無い。あいつは生徒会役員にも抜擢される程勤勉、且つ割り当てられた業務をこなせるだけの能力もある。人当たりや会話能力といった普段の素行にも特に問題は無い。
下世話な話、トキノメグルの様に教官の下で基礎をしっかりと固めているウマ娘は、トレーナー側からしても扱いやすい。その年の内からデビュー戦を熟すことが出来る分、もしレースで好成績を収めようものなら名誉と特別報酬が楽に手に入る。まあそんな理由でウマ娘を担当しようとするトレーナーはそう多くはいないが。
「これ以上は……耐えられないな」
でも、もし今年も彼女がスカウトを受ける事が出来なければ……確実に出遅れる。同世代の他の子達がクラシック級やシニア級を受ける中一人だけジュニア級を走るとなれば、情報も不足し、モチベーションを刺激し合うライバルとも出会いにくい。
今更俺がどうこう出来る問題では無いのは分かってる。彼女らのメンタルケアを適度に行い、後は選抜レースの健闘を祈る位しか俺に残された道は無い。
それでも……何か出来ることは無いか、探してしまう自分がいる。
「……」
胃の不快感は大分薄れてきた。

何気無く。別に深い意味も無いまま取り敢えず携帯を手に取り、時刻を確認しようとして電源を入れると……

『大丈夫ですか？』

『もしその二日酔いが酷いのであれば、他の教官に業務を委託することも可能ですよ』

『……本当に大丈夫なんですか？』

『やっぱり、無理に連れ出した私のせいですよね？』

『その、すいませんでした』

『……あの、『耐えられない』ってどういう意味ですか？』

『本当にごめんなさい、悪気は無かったんです』

『ごめんなさい』

『ごめんなさい』

『ごめんなさい』

……勝手に人の部屋を盗聴して、勝手に掛かり気味になるのはやめてくれ。

「怒ってませんから安心して下さい」

傍から見れば野郎が部屋の中で独り言を呟いているという、何やら不気味な感覚に苛まれるだろうが、盗聴しているのであれば会話は通じる。……ほら、通知が来た。

『……本当ですか？』

「本当ですよ。でも盗聴は別件なので後でお話があります」
『安心しました。次からは気を付けます』
「お酒の席では仕方の無い事です。ちゃんと反省出来ているのであれば今更咎めはしませんよ。ですが盗聴の件はまだ許していません」
『ではお大事に、トレーナーさん♪』
「盗聴の件は……」

それ以来通知は来なかった。

■□■□■□

午後。
昨日と同じ様に教官としてウマ娘達の気合いを充填させ、選抜レースに向かわせた。
今はその様子を観察中だ。
昨日選ばれなかった分やや焦り気味ではあったが、十分許容範囲内。うちからは既に三人、先程トレーナーに声をかけられていた。
九人のウマ娘がゲートに入っては、出走していく。途中何度か自分の担当するウマ娘

が走りながらも、その繰り返しを何度か見ていると次第に慣れてしまうのが人間という生き物だ。

選抜レースの期間中でも最初の三日間はスカウトが頻繁に行われるが、その内容は大きく異なる。

言い方は悪いが、基本的に最初の一日の時点で「天才」と称されるウマ娘はスカウトされ尽くす。そして二、三日目にスカウトされるのは殆どが「凡才」だ。

別に凡才だからと言って恥じる事は何一つ無い。何せ天才なんてこのトレセン学園という場においてでも同世代に片手で数え切れる位しかおらず、そしてトレーニング次第でその天才を喰らう事も十分すぎるほど可能だからだ。事実、遠距離への適性が乏しかったミホノブルボンだって、壮絶なトレーニングの結果菊花賞を見事なまでに走り切ったのである。

だがそれでも、天才は突飛だ。突飛だからこそ目に残るのは凡才では無く、天才だ。

故に二、三日目に開催される選抜レースでは大器晩成型のウマ娘がスカウトされる。そしてそのスカウトの風景は一日目の様な賑やかさは抑え目であり、突発的と言うよりは寧ろ計画的なものが多い。

だからであろう。そこにいる一人のウマ娘に、会場の誰もが注目したのは。

「おお？今日はまた一段と気合入ってるな、トキノメグル」

特段優れている部分がある訳でも無い、平々凡々なウマ娘――――昨日の走りで植え付けられたその偏見を無に帰す威圧感を放ち、トキノメグルはゲートに身を収める。

『今日の選抜レースに天才は居ない』と、そうトレーナー陣が勝手に思い込んでいた所で急に現れたのだ。新人からベテランまで、一人残らずその目を奪われるのも道理である。

また、異様な雰囲気を感じ取ったのはトレーナー陣だけでは無い。トキノメグルと同じくゲートに入っている他のウマ娘達も突如として現れた異様な怪物を横にして、先程まで滚らせていた闘志を引っこ抜かれていた。堪え切れずにゲート内でそわそわし始める子だっている。

ふと我に返ったスターターが急いでゲート開閉の準備にかかる。それに呼応してゲート内のウマ娘達も出走体勢を取り始めて。

ガコン、という音と共に、どろり、と「それ」は滑り出る。

禍々しい漆黒の陽炎を身に纏い、トキノメグルは少し先の地面を蹴りつけ、そして引き寄せる。唯のその繰り返しが着実に他の子達との差を作り出していくのだ。

精々が距離５００程。スタミナをあまり気にする必要は無く、それ故に全員が全員スプリントを決め込んでいる筈。それなのにその隙間は滞りなく開いていく。

光の無い滅紫の瞳でゴールを見据え……彼女は瞬く間にゴールテープを切った。

静寂。だがそれも直ぐに終わり、ベテランを含む多くのトレーナー達が立ち上がるのを確認する。

「おいおい、すげぇなアイツ」

「おかしいな、あれくらい圧倒的な子なら昨日見落とした筈がないんだけど……」

「ベテランも何人か行ってるし、惜しいけど俺らの出る幕は無さそうだなぁ」

周りが一斉にどよめき出す。話題は勿論、トキノメグル一色だ。

「よしっ」

良かった。この流れならほぼ確実に誰かしらトレーナーは決まるだろう。それに見合うだけの走りを彼女は成し遂げたのだ。

そのままトキノメグルは数人のトレーナーに囲まれる。会話は聞こえないが本人は少々困惑している模様。そりゃあいきなり何人ものトレーナーがスカウトしに来たら「誰を選ぶべきか」という今まで味わった事も無い疑問が湧いてくるはずだ。

トキノメグルは苦笑いを浮かべながら、数人のトレーナーの話を捌いている。だが選抜レースはまだ残っている事もあり、この後走るウマ娘を気遣って彼女は直ぐにその場を離れた。トレーナー陣も納得したように元居た場所に戻ってくる。恐らくどのトレーナーにするかは保留にしたのだろう。正式な返答は選抜レースがひと段落ついた

後だろうか。

……そうか。トキノメグルも、遂にトレーナーを持つのか。

「何というか、感慨深いな」

似たような感覚は昨日も味わったのだが、その中身は全く違う。彼女と共に過ごして得た思い出は決して少ない訳ではなく、時には衝突する事や、距離が近いと駿川さんに怒られた時も多々あったが……今こうして思い返すとなかなかに感慨深い。

だが……その思い出に、このままでは影が落ちる。

惜しむらくは昨日の夜、喧嘩別れの様になってしまった事。

「それは、嫌だな」

彼女と一緒に作った思い出を、灰にしたくない。最後は笑って彼女を送り出したいんだ。

……会って、話をしよう。昨日彼女が機嫌を悪くした原因は終ぞ分からなかったが、それでも謝意は伝えないまま終わりたくない。言葉だけの薄っぺらいものだと笑われてもいい。許しを貰えなくとも、甘んじて受け入れよう。

でも、今何もしなければ、きっと後で後悔する。

「その為にも、今やるべきことはきっちり熟すか」

個人的にはすぐさま彼女の下に行きたいところではあるが、まだ選抜レースは終わっ

ていない。まだ走っていない子の中に、俺が担当している子も当然いる。
後腐れの無いように――それはトキノメグルにも、他の子達にも当てはまる。今彼女を優先して他の子を放っておけば、今度はその子との軋轢が出来てしまう。
「メール、しておくか」
内容は……『午後六時、昨日いたベンチ付近に来て欲しい。君と話がしたい』……こんなところか。
メールを送信した途端既読がついた。えぇ……？
『分かった。けど、時間と場所はこちらが指定してもいいかな？』
取り敢えず一安心。会話も出来ない程怒っている訳ではないようで良かった。
『大丈夫だ。詳細が決まったら折り返し連絡してくれ』
『いや、それには及ばないよ』
『どういう意味だ？』
『左を見てくれ』
意図は分からないが、取り敢えず指示通り左の方を見る。
目を凝らして何かないかと探してみると、遠い向こうにレースを終えたトキノメグルが校舎の方に戻ろうと、ターフを背にしている様子が目に入る。どうやら最初から彼女は俺がどこにいるのか知っていたらしい。

表情までは見えないが、わざとらしく地面に『何か』を置いていた。

『手紙を置いた。ゴミとして捨てられないように軽く土と草をかけておく。選抜レースが終わり次第回収してくれ。そこに集合時刻と場所を記してある』

少し間をおいて、そんなメールが俺の下に届いた。

何故にこんな手間を、という思考を阻む様にターフの上でウマ娘達がレースの準備をする。そしてそのままゲートから飛び出すウマ娘達を眺めながら、担当の子の番が回ってきていない合間を縫って返信する。

『どうして手紙を使ったんだ？』

『今それは言えないな。だがお互いの為にもこれは必要な事なんだ』

メールを送ってからほんの数秒で、この決して短くない文章が返ってきた。どうやら俺の疑問は先読みされていたらしい。

『了解した』

簡潔に、そう返答する。それ以来ピタリと通知は止んだ。

再度左側に視線を向けてみるも、既にそこにトキノメグルの姿は無かった。

「……」

思えば、手紙にしたって妙に用意が良すぎる。その場で認めるには少々時間が足りなかったはずだ。俺がこうやって話を持ちかける事も想定済みだったのだろうか。

「……いや」

流石にそれは無いだろう。もし先の推測が正しければ、彼女は自分にスカウトが来る事が予め分かっていた事になるはずだ。何せスカウトが来なかった昨日は電話という選択肢を俺が取っていた訳だから……常識的に考えて、そんな未来予知じみた所業は不可能だ。

だが、万が一、彼女が、予知ではなく、確信を持っていたとすれば？

それが意味するのは――

「！」

いけない、レースに集中していなかった。

既にゲートの中にはウマ娘達が揃っており、その中には俺が担当する子も一人いた。

つまらない妄想はよそう。今は彼女らの勇姿を見届けるのが優先だ。

若しかしたら――こうやって俺の妄想が遮られる事も、トキノメグルからすれば想定済みだったのかもしれないが。

■□■□■□

本日の選抜レースの全行程が終了した。
今日は合計五名の担当バがトレーナーから声掛けを貰った。内一名はトキノメグルでまだ誰をトレーナーにするのかは聞いていないが、まぁそれは大きな問題ではない。
順調も順調。二日目にして俺が担当している子の半分以上がスカウトを貰ったのだ。例年と比較しても今年はかなり出来が良い。
「さて」
少し緩んだ思考を矯正する。
大気中の障害物がスペクトルから単波長を奪い去り、お陰で網膜まで到達する光は赤一色。このままでは直ぐに辺りは黒に染まる。その前にトキノメグルが地面に埋めたという手紙を回収せねばなるまい。
まだ新しい数時間前の記憶を引っ張り出し、トキノメグルがいたであろう地点まで足を進める。
数分、地面に細心の注意を払いながら辺りを散策していると。
「ん……」
少しだけ、不自然に草が散らばっている箇所を見つける。しゃがんで土を払ってみると、土の湿気でやや崩れた紙がそこにはあった。
破れない様に慎重に開くと、目的不明の注意喚起が二箇条。

『手紙の内容は決して口に出してはいけない』
『読み終えたら、直ちに携帯の電源を切ってから指定の場所に来るように』
何だこれ、と口に出しそうになるが、一応押しとどめておく。
彼女は意味もなくこんな事をする子ではない。真意は測りかねるが、別に難しい事でもないし一々疑問を挟むのは止めておこう。
注意喚起から目を下にずらしていき、そこに記されていた場所と時間を確認していく。
黙読を完遂し、しっかりと携帯電源を落としてから腕時計を横目に見る。門限もあるから早めに設定したのだろう、時間は十分程度しか残されていなかった。
目的地は学生寮近くの裏手。休日はウマ娘達の落ち着ける公共スペースとなっている反面、平日の夜は人通りが極端に減る。そして何よりこの辺りは寮長の目が届きやすい分、職員やトレーナーがほとんど顔を出さない場所だった。
そこに向けて少々早歩き気味で移動する。遅れるよりは早く着く方が気楽だからね。
昼の日差しには暖かさを感じる一方、夜風は皮膚を冷たく撫でる。深呼吸をすれば肺の中が冷気で埋まり、思わず白息を吐く所作をしてしまう。
普段あまり顔を見せない学生寮が見えてくる。入口付近にはまだウマ娘達の姿が多くあるが、その横を抜けて建物の側面に回ってみるとその賑やかさは遠いものとなっ

た。

次の建物の角を曲がると集合場所が見えてくる……という時に。静かなはずの裏手で人の声がするのに気付いた。

「……理由を、聞いてもいいかな？」

「ん……」

声の主はあまり交流の無い新人トレーナー。確か今年から複数担当を持つ様になったんだったか。そしてその話し相手をしているのは俺をここに呼びだしたトキノメグル。

状況から察するに……俺が来る前に彼女は此処にいて、その姿を見かけたトレーナーがスカウトをしている……といったところか。そしてトレーナーの声色を伺う限り、トキノメグルは彼の申し出を断ったのかもしれない。

彼には酷な話だが、ベテラントレーナーも一人か二人、彼女に声を掛けていたのを俺は覚えている。トキノメグルからしてもベテランを自分の担当トレーナーにする方が信頼と実績がある分安心できるだろう。建物の陰に隠れながら、そっと心の中で彼に慰めの言葉を掛けておく。

「理由、か。……そうだな、申し訳ないが既にトレーナーにしたい人は決めてるんだ」

トキノメグルは苦笑いをしながらトレーナーにそう告げる。やはりベテランを選ん

だのだろうか。今日声を掛けていたベテランと言えば……確かチームレグルスのトレーナーだったかな？

教官ながら、誇らしい気分になってしまう。たまに自分が昔教えていた子がレースに出て勝っている姿を見るが、とても嬉しくなってくるものだ。それがましてやＧ１ウマ娘をよく輩出しているチームレグルスとなれば……期待してしまうのも無理は無いはず。

そうやって少々、浮かれていた所に……まるで冷や水をぶっかけられたかのような衝撃がやって来た。

「いや、先輩方から聞いたよ。どうやら君、今日受けたスカウトを全部断ったらしいね」

……は？スカウトを、断った……？

「どのトレーナーも口を揃えて言っていたよ。トキノメグルは『先約がある』と言って断ったと」

「そうだね。でも嘘は言ってない」

「でも、君のトレーナーになれた人の話を全く聞かないんだ」
「わざわざ言いふらす事でも無いと判断したんじゃないかな？」
「謙遜を。今日君が走ったレースは我々トレーナーの中でかなり印象的でね。おまけに誰がトレーナーになったか不明なんだから、今日はその話で持ち切りさ」
「ならトレーナー側が嘘をついて隠しているんじゃないのか？」
「どうせすぐばれるんだ。そんな事をしても無意味なのは聡い君なら分かるだろう？」
「……」
　話が、頭の中に入ってこない。
「君にも何か事情があるのかもしれない。だから君が話す気が無いなら構わないんだ。こうやって質問攻めにしているのも、言ってしまえば僕の身勝手な興味が故だからね」
「すまないね」
「でも、君はもう高等部所属だ。老婆心ながら言わせてもらうが、今年中、それも夏までにはトレーナーは決めた方が良い。今年の内からデビュー戦を終えてＧ３の舞台を経験しておいた方が、クラシックのＧ１を目指しやすくなるからね」
「ああ、理解しているつもりだ」
「それなら良いんだ。じゃあ、もう僕は行くよ。時間をとって悪かったね」
「では」

三年間。

彼女は確かに努力してきた。それは断言できる。

レースに勝つために。ひいてはその前段階として、トレーナーに認めてもらう為に。

彼女は三年間ずっと努力してきたはずだ。

それなのに。どうして今になって……そのスカウトを断るんだ？

彼女から希望のトレーナーがいるだなんて話、聞いたことも無い。他のトレーナーに逆スカウトをする素振りなんて、今の今まで一度も見たことが無い。

もう何が何やら……分からなくなってきた。

トキノメグルは一体、何がしたいんだ？

「おや、紫月教官。盗み聞きとは趣味が悪いね」

「え？」

トレーナーが俺のいる方とは別方向に帰っていったまでは良かったが、そんな事は関係なかったらしい。とっくに気づかれていたようだ。

「さて、どこから見ていたのかな？教えてくれると有難いんだが」

「っ……」

言葉の節々に圧を感じる。返答をミスれば前みたいに掛かり気味になるかもしれない。
「君が「何か」の理由を、トレーナーから聞かれている所から」
「ふむ。ではその「何か」は……もう察しがついているかな？」
「スカウトの謝絶、か？」
「ああ、正解だ」
威圧感は少しばかり鳴りを潜め、今度はどこか遠くを見ながら自嘲するような笑みを浮かべていた。
「想定外だ。別に君にあの場を見せようだとか、そんな邪な考えは無かった。ただ君とのお話に邪魔が入らない場所を選んだに過ぎなかったんだ。……でもまさかそれが他の人に見つかり、あろうことかスカウトされるとは……思いもよらなかった」
「……仕方ない。今日の選抜レースの結果を見れば、注目されるのも納得だ」
「そうだね。……本当にそうだよ。少し気が立っていたな」
ぐるり、と首が回る。そしてその瞳が真っ直ぐに俺を射抜く。
「さあ、君のお話はなんだい？」
正直自分が何を話しに来たのかなんて、先の衝撃によって脳から振るい落とされていた。それを慌てて拾い上げ、口を動かす。

「あ、ああ。俺は君に、昨日の事で謝りに来たんだ」
「……は？」
昨日の様に、怒りを含んだ返答では無かった。その代わりにまるで理解できない未知の生物を見るような、そんな眼差しを向けられた。
「本当に、分からないのか？」
「え？」
「さっき君が盗み聞きしていた問答を経て尚、私が昨日君に怒りを見せた理由が、分からないのか？」
「……」
分からない。何の関連があるというのだ。昨日の出来事と先程の事は、無関係では無いのか？
「ははは っ……本気で言ってんのかよ……はは、ははははっ!!」
辺りが静寂だからだろうか、嫌に彼女の声が耳に残る。その笑い声に、どんな感情が混じっているのだろうか。何が発露しただろうか。怒っているのか、嘲笑っているのか、呆れているのか、悲しいのか……そのどれもが有り得そうで、同時に見当違いにも思える。
彼女の笑い声には、そんな異質さがあった。

「はははははっ！ここまで鈍いとは！道理で三年間、何をやっても気付いてくれない訳だよ！はははははっ……まるで私は、道化じゃないか……は……」
　彼女は糸の切れた人形の様に力なくよろけてしまい、近くの椅子に勢いよく体を投げ出す。顔が項垂れており、笑い声も止んだ今は彼女が何を考えているのかが分からない。
「大丈夫か、トキノメグル……」
「『トキ』だ」
「……え？」
「『トキ』と、そう呼んでくれ」
「それは……」
「出来ないのかい？まあ、そうだろうね」

「君の担当バ――――トキノミノルが、黙っちゃいないだろうからね」
「――――」
　何故それを、という言葉が喉から出ない。
「何故知っている、と言いたげな顔だね。ふふっ、驚いたろ？もう隠す必要も理由も無く

なったからね」
　項垂れた顔を上げてトキノメグルは真っ直ぐ俺を見つめ……彼女の持っている小さなバッグから、それを見せつけてきた。

　微糖の缶コーヒー。

「君、これを置いたまま駿川さんに連れていかれたじゃないか。中身がまだ残っていたし、かといって放っておくのも嫌だったから回収したんだ」
　勿論中身は飲んじゃったよ、と軽く微笑んでいるが、そこにはほんの少し怒りの色があった。
「これを返すために、実はあの後待っていたんだよ」
「っ……」
　あの時の会話か。あれを聞かれたから、バレたのか。
「おっと、勘違いしないで欲しいな。陰に隠れて盗み聞きしていたのは確かだが、別にその前から駿川さんがトキノミノルだとは知っていたし、君の担当バだった事も知っている」
「なっ……」

有り得ない。

百歩譲って、駿川さんの正体がトキノミノルだという事はバレるかもしれない。彼女が現役だった頃に彼女のファンで、且つトレセン学園に入ることが許されて、更に生徒会役員等の駿川さんと関わる機会が多い人物なら気付ける可能性も十分にある。

だが……俺が彼女のトレーナーだった事なんて、知る由もないはずだ。

俺は元トレーナーである事は公認しているが『トキノミノルのトレーナー』だったとは一度も言ったことは無い。少なくとも俺が教官になってからは。

そしてトキノミノルは確かにメディアに顔を出したことも何度かあるが、トレーナーとして俺が一緒にインタビュー等を受ける事は一度として無かった。単純に必要性が無かったし、そんな余裕なんて無かったからだ。

また、既にトキノミノルの担当を外れてから六年は経つ。高等部三年であるシンボリルドルフがこの学園に入学した時だって、既に俺は教官だったんだ。現高等部一年のトキノメグルが知る方法なんて、無いはずだ。

「私の父はトキノミノルの大ファンでね。私が小学生の時、よくレースの会場に連れて行ってもらったものさ」

「……？」

……何の話だ？

「私の競争バとしての名前だって、トキノミノルのファンになった途端に役所に行って改名したくらいさ。元々あった『メグル』に同じ『トキノ』を付け足して出来たのが、私の今の名前。ほんと、迷惑な親だよね」

「特に東京優駿は酷かった。彼女の勇姿を間近で見たいと、母も一緒になって前日からの場所取り戦争に巻き込まれたっけ。眠気もあったし、正直帰りたかったのが本音だったよ」

「で、実際に会場に入ってもやっぱりあんまり面白くなくてね。父は入場してくるトキノミノルに釘付け、母はウマ娘だけどダービーには出られなかったらしくて、別の意味で興奮していた」

「レースが始まって……トキノミノルは確かに速かった。でも別に憧れる事なんて無かったし、逆に毎度レースが有る度に連れ回されていたから、彼女が疎ましかったくらいさ」

「でもね。あの時私は君を見つけたんだ」

「目の前の席に座っていた君が立ち上がり、あろうことか叫んだんだ。『トキ！止まれ！』……とね」

「正直訳が分からなかったさ。おかしな人、というのが第一印象だった」
「でも、その理由は直ぐに分かった。レースが終わった後、トキノミノルは足を壊していた。そして君が彼女の下に駆け寄り、彼女を抱き締めている姿を見て。子供ながら私は感動したんだ。『嗚呼、なんて美しい関係なのだろう！』……とね」
　あの姿を見られていたからバレたのか。普通のファンなら怪我をしたトキノミノルを心配して、彼女のトレーナーなんて眼中に無かっただろうに……この子だけは、トキノミノルではなく俺を見ていたのだ。
「トキノミノルの怪我を、トレーナーである君が誰よりも早く気付き、人目なんて気にせずに叫び、彼女の事を想う。……実に、実に感動的じゃないか！」
「極めつけは走り終わった後の君さ！トキノミノルが倒れた後、歯を食いしばり、拳を握りしめ、今にも駆け寄りたい気持ちを抑えて耐える姿！他のウマ娘との接触なんてそっちのけで担当に駆け寄り！レコードタイムを見て絶望に浸り！そして！担当バの為を想い、全ての罪を背負う覚悟を決めた、君の顔！嗚呼……嗚呼ッ!!君は本当にッ……!!」
　ついていけない。そんなの、別に大した事では……
「ッッッ～～～!!その顔だよ!!!」
　いつの間にか立ち上がっていた彼女は、頬を上気させながら俺の顔を見ていた。

目の色が、紫から緑に変わっていた。

「あの時から、君以外を担当に持つなんて考えられなくなったんだ！あんなに真摯に私達を見てくれる誠実な人なんて、他にはいないからね！」

「そんな事……」

「他のトレーナー達は、気付きもしなかったのにかい？」

「っ！」

「あの場で君が何を言っても、更には走行中のトキノミノルを見ても、彼らはまるで取り合ってくれなかったじゃないか。まあベテランの人は君を信じてくれていたようだけど、自分で気付けないんじゃあ話にならないね」

あの場にいた他のトレーナー達を、明らかに見下すような仕草。だがそれでも……殊あの場においては、俺ははっきりと感じていた。

同じトレーナーなのに、何故トキノミノルを見ても怪我が分からないんだ……と。

だから強く言えない。それは偏に、後ろめたさがあるからだ。

「唐突だが……君はあの女にプロポーズしたらしいね」

「はっ？」

「昨日あの女が発情しながらのほざいていたじゃないか。『君が欲しい』……そう言われたと」
「違っ……！それに訂正したって後から言ったよな！」
「分かっているさ。君が恋愛感情から言ったわけではないことくらい」
「ほっ……」
「だが、気に食わない。実に気に食わない」
　先程まで緑色だった彼女の瞳は紫へと戻り、ついでにハイライトまで失われていた。
「この三年間、私にとっては毎日が選抜レースの様なものだった。君に少しでも私を担当に持ちたいと、そう思わせる為だけに走って来た。逆に本物の選抜レースは正直どうでも良かったんだ。君以外のギャラリーに目を付けられたくは無かったからね。……今日はちょっと昨日の事が有って気が立ってしまって、本気で走ってしまったけどね。お陰様でスカウトの嵐だったけど……そのせいで逆に惨めな気持ちになったよ」
　だから選抜レースの一日目、普段通りの走りじゃなかったのか。
「それに君は今年でトレーナーライセンスの期限が切れる。君には何としても更新して欲しかったんだけど……ルドルフ会長から聞いたよ。ライセンスを放棄するんだって？」
「もしかして、君が生徒会役員なのは……」

「こういう時の為に情報を得る為さ。勿論守秘義務の観点から重要な事までは教えてくれないよ。でも後で結局広まる情報を先に察知するくらいは出来る」
「皆して職権乱用しやがって……」
「更新試験は六月中旬と十二月中旬の二回、申し込み締め切りはその約一か月前。つまり夏にデビュー戦をしたい私にとっては、既にデッドラインは一か月先まで来ていた。多分その焦りもあってか、昨日はなりふり構わず本気で走っちゃったのかもね」
今までの彼女の行動すべてに合点がいく。もしかしたら俺が知らぬ間に彼女が望む方に誘導されていたのかもしれない。
『君が欲しい』……だっけ？君は彼女の走りを一目見てそう言ったらしいな。でも私は言われていない。これは明らかに君の中で、私が競走バとしてトキノミノルに劣っていると思っている証左じゃないか」
「そんな事ない！俺が教官だから君を担当に持つ気が無かっただけで……」
「なら、教官を辞めてトレーナーに戻ってくれよ。そして私をスカウトしてくれたならば、君の言葉は本当だったと信じるし、君に喧嘩を売るような言葉を言った事を謝罪しよう」
「なっ……！」
教官を辞めて、トレーナーに戻るだと……？

「『そんな事、駿川さんが許すわけがない』」
「ッ！」
「図星だね。ふふっ、本当に君は分かりやすい。そしてその誠実さに私は惚れたのだ。それ自体に文句は有り得ないよ」
　彼女は手に持っていた微糖のアルミ缶を見せつける様に俺の前に差し出し。
「だから、奪い取るんだ。君の中の『トキ』は今から、私に塗り替えてやる」
　メキッ、と音を立てて、握り潰した。
「トキノミノルの無敗記録は十戦だっけ？なら私は十一戦、生涯無敗を目指そうか。レコードだって、八回更新してやる。無敗の三冠だって取ってやろう。そして何より、君を縛り続けているあの東京優駿のレコードだって、更新して見せよう」
　無謀だ、なんて言葉は彼女を三年間見てきた俺が言えるはずも無かった。本気でそれが出来る可能性があると、そう納得させるだけの強さと気概が彼女にはあった。
「そして――――もし君が望むのならば、先に挙げた私の目標なぞ溝に捨てて、止まってやる」
「……え？」
「東京優駿の場でだって、どこでだって、止まってやる。君が『止まれ』と叫べば、その場で止まってやる。トキノミノルが無視した君の言葉に、私は絶対に従うと誓おう」

「はっ……？え……？」
「私は君を信頼している。だからこれは『当然』の事なんだよ」

理解不能。
まだ……まだ、トキノミノルを超える為に走ると言うのであれば、十分理解出来た。
その原因が俺にあると言われても、納得は出来ないが理解は出来た。
だが、彼女は俺が止まれと言えば止まると、そう言った。
それじゃあ彼女は……何の為に走るんだ？
俺の為か？はたまた彼女自身の為か？

……分からない。
彼女が俺をトレーナーとして欲している事は分かった。そしてその発露として、トキノミノル……もとい俺の元担当バの記録の悉くを更新する気でいるのも分かった。
これは彼女自身が望んだ事だ。
だがその一方で、俺の命令一つで彼女は自身の望みを捨てると言った。
これは彼女からすれば俺の望んだ事だ。

ああ、そうか。
彼女はきっと、自分の望みよりも俺の望みを優先してしまっているのか。
『トレーナーはウマ娘を支える杖である』……その考えを至上命題として遵守する者ばかりがトレセン学園にいるからこそ、頭から抜け落ちてしまっていた。……いや、それも見苦しい言い訳か。

そうだ。そうだよ。
かつて俺の下にも、居たじゃないか。
俺達が君達を支えたいと思う以上に、その杖に恩返しをしたいと思ったウマ娘が。
酷い矛盾だ。道具を道具と割り切れば、互いの信念は確固たるものとなるだろうに。
でも、その矛盾が存外、悪いものじゃ無くて。
悪いものじゃ無いから、その矛盾に憧れるウマ娘が生まれたんだ。
「私は君の下で走るために、トレセン学園にやってきたんだ」
「君が教官をしていると知った時は、終わりだと思ったよ。まだ幼かったこともあって一時期自主退学すら視野に入れていたものさ」
「でも、出来なかった。専属契約は結べてなくても、君が私をただスカウトされなかったウマ娘の内の一人としか見ていなくても、私は君の教えの下で走る事に、嘗て無い程の

喜びを覚えたんだ。一度味わってしまえば、もう抜け出せられなかったんだ」
「時間を追うごとにその気持ちは徐々に膨らんだ。もっと、もっと、と抑えきれなくなってきた」
「そして今年の冬、このままでは君のトレーナーライセンスが失効してしまうと聞いて……遂に私は形振り構わなくなって来た」
「だから……今日こうやって自分の秘め事を吐露しているのは、必然だったんだよ」

「ねえ、紫月トレーナー。どうか私と専属契約を結んでくれよ」
「そしていつの日か……『トキ』と、そう呼んで欲しいな」
彼女の目は再び、緑色に輝いていた。
それがどこか……誰かにそっくりな、エメラルドを思わせるようで。

錆び付いた何かが、軋む音がした。

第四コーナー

あの日から、トキノメグルは変わった。

今までは駿川さんの策略と俺の「担当ウマ娘達には出来るだけ平等に接する」という考えもあり、トキノメグルは特段目立った行動は起こさなかった。事実そのお陰?で俺は先日まで彼女の秘めた思いに全く気付かなかったんだから。

そもそもトキノメグルが中等部一年の時は彼女の担当をしていた時間の方が短い位だった。駿川さんもその時はまだ彼女を警戒対象として認知していなかっただろう。

思えば異変に気付くべきだったのはトキノメグルが中等部二年になった時だった。駿川さんによる「俺の担当ウマ娘を頻りに変更して互いに癒着するのを避ける」という策略は、後から思えば殊トキノメグルに対しては効力を劇的に弱めていた。

きっとこれはトキノメグルが中等部二年で生徒会役員になった事が原因だろう。書類等が生徒会役員の目にも入る以上、駿川さんがあからさまな職権乱用を行えば、例え他の生徒会役員がスルーしてもトキノメグルは絶対に見逃さない。職権乱用が公にな

れば謹慎は免れないだろうし、何よりこれ以上俺に干渉する事が出来なくなる。まぁ駿川さんなら何かしら対策はしているだろうが。

かと言ってトキノメグルが優位に立った訳では無い。トキノメグルが俺に「トレーナーになれ」と言えば、盗聴器越しにそれを聞いた駿川さんが拡大解釈の後に「脅迫」と断定して謹慎処分を下すだろう。程度が酷ければそのまま退学にもしかねない。……トキはその辺りの容赦が無いから。

だからトキノメグルは自らの走りで俺を魅了し、俺の方から「トレーナーになりたい」と言わせる必要があった。

だが幸か不幸か、俺には嘗て「トキノミノル」と言う名の緑の悪魔を担当していた経験がある。単純に俺の目が肥えてしまったのも有り、更には駿川さんからの要望もあって、どれだけトキノメグルが優れていても余程の事が無い限り彼女を担当する気にはなれないだろう。

要は互いに牽制し合いながら三年間が過ぎたのである。そんな事俺は一切知らなかったけれども。

だが、その均衡は一方的に崩された。

あの日を境にトキノメグルのアプローチは表面化したのだ。

たったそれだけ、と思うかもしれないが、彼是三年間秘めてきた彼女の思いは熟成に熟成が重ねられており、それが一気に顕在化したのだ。

例えるなら……そう、キンキンに冷えたコーラを入念に振った挙句、ダメ押しと言わんばかりにメントスをぶち込んだ後の様な状態だ。果たしてペットボトルから出てきた泡は「たったそれだけ」で済ませられるだろうか?……まぁそういう事だ。

しかもその泡は時間が経てば治まるどころか、さらに勢いを増していくのだ。止まらないメントスコーラなぞ悪夢以外の何者でもない。

さて、今までの鬱憤を晴らすように俺にアプローチを重ねるトキノメグルだが、それに呼応して猛烈に機嫌を損ねている方が一人いる。

何を隠そう、駿川さんである。

実を言うとあの日の俺とトキノメグルの密会はそれなりに長い時間行われていた。時間にすると十分から二十分程か。

短いと思うかもしれないが、逆に考えてみてほしい。あのトキが警戒対象のウマ娘と俺を十分以上も二人きりにするだろうか。しかも門限スレスレの夜に、人気の無い場所で。……常識的に考えて有り得ない。

実際俺がトキノメグルから壁ドンされた日だって、俺が電話を掛けてから駿川さんが

現場に到着するまでに五分と掛かっていない。
なら何故今回に限り十分以上も俺を放置していたのかと言えば、答えは単純。トキノメグルによる小細工が原因だ。
今から思えばあまりにも簡単な事だと思うが、要は携帯の電源を落としてしまえば位置情報は遮断される。盗聴はそもそも俺が口を開かなければ良いだけの事。後は集合場所に盗聴対策に妨害電波なりを予め準備しておけば良い。加えてあそこは学生寮の近くだからこそ電波が煩雑に飛び交っており、数分程度の妨害行為がバレるリスクはかなり少ないだろう。
後から聞いた話によると、俺達が丁度話し合っている時に駿川さんがトレセン学園内を猛烈な速さで走り回っている姿が目撃されたらしい。今は既に現役の時の七割程度の実力しか出せないだろうが、それでも元が異常なのでかなりの速さだっただろう。そんな高速巡回でも俺達の場所が見つからなかったあたり、学生寮近くを選んだトキノメグルの悪知恵が輝いたと見受けられる。
よって駿川さん視点からすれば「数十分の間紫月トレーナーの位置情報が消えて盗聴も効かなくなる時間が有り、その翌日からやたらと彼と警戒対象であるトキノメグルの距離感が近くなっている」という事態が起きている訳だ。怪しまれない方がおかしいだろう。

だが、意外なことに駿川さんは俺を問い詰める様な事はしなかった。
俺としては、彼女はいつかの日の様に俺を問い詰めると身構えていたのだが、何故か駿川さんは俺に何も言わなかった。
だが、納得はしていないらしい。彼女の機嫌はあの日から悪くなる一方で……それでもどこか、寂しそうな顔をしているのだった。
率直な感想、今の駿川さんは色々な意味で危険だ。日々蓄積されていく彼女の不満が爆発すれば、骨の一本や二本は覚悟しておいた方が良いだろう。
しかしその不満が俺に向くのであれば、それはむしろ有難い事だ。もしトキノメグルにその矛先が向けば……トキノメグルのバ生はへし折られ、駿川さんの人生は警察の手によって終わりを迎える。
また、その不満をずっと貯め続けていれば、いつかきっと駿川さんは壊れてしまう。そんな姿は、見たくない。

更には、トキノメグルに以前の余裕が無くなっている事も事態を悪化させている。
彼女は何とかして俺にトレーナーライセンスを更新させたがっている。従って更新試験の受付締め切りである五月の中旬までに俺を説得する必要があった。
だが、俺がトレーナーになる事は、俺が駿川さんを裏切る事を意味する。

だからトキノメグルがやろうとしている事は俺にトレーナーとして戻る様に説得する事ではない。俺にトキノミノルの足を壊した罪を忘れさせ、駿川さんを棄てさせる事だ。

……そんな事、出来る訳がないじゃないか。

俺はトキノミノルの未来を奪った事を罪だと認識していても、それ自体を疎ましく思った事なんて一度も無い。互いに停滞した時間の中で傷を舐め合っていた頃を、客観的に抜け出すべきだと認識しつつも……今から思えば、心のどこかでは歓迎していたのだ。あの止まった時間の中で少しずつ、俺は贖罪が出来ているのではないかと、そう勘違いしていられたんだ。

だが無情にも、俺の中にある時間はトキノメグルによって無理矢理動き始めようとしている。未だ止まったままの駿川さんを差し置いて。

しかし、もしトキノメグルを無視して駿川さんのいる止まった時間の中に戻れば、今度はトキノメグルにトレーナーが就かなくなる。あの子が妥協する姿なぞ、あの日の彼女の目を見てから俺には想像できなくなってしまった。

駿川さんを尊重すれば、トキノメグルのバ生に傷がつく。

トキノメグルを尊重すれば、駿川さんの人生に傷がつく。

どうしたらいいんだ。

何が正解なんだ。

俺は……

■□■□■□

時は既に五月に突入した。

結局今年の選抜レースは個人的に成功で終わった。うちからは合計十五名のウマ娘がトレーナーからのスカウトを貰い、俺の下を笑顔で去って行った。中でも中等部三年が全員スカウトされたのは大きい。

残念ながらスカウトされなかったウマ娘も当然出てくる。基本的にそう言った子達は中等部二年なので、悔しさを糧として次の選抜レースにてしっかりとスカウトをもぎ取って欲しい。まだまだチャンスは残っているのだから。

選抜レースが終わり、俺の受け持つ担当の子も一新されると思っていたのだが、まだ

その旨の通達や辞令は来ていない。他の教官の大半は既に新しく持つ担当の子のデータを渡されているのだが……何かあったのだろうか。

だが正直な事を言うと、今の俺にはウマ娘を指導する気力と余裕が無かった。だから現状を不思議には思っていても素直に有難かったのだ。

何とか上手く場が収まらないだろうか――――そんな事を頭の中の隅々まで巡らせた挙句徒労に終わる、その一連の流れを幾度となく繰り返しているのが今の俺だ。

「あの子、また模擬レースで勝っているな。確か未デビューじゃなかったか？」

「ああ。名前は……そう、『トキノメグル』だ。レグルスのトレーナーからのスカウトを断ったって、専ら噂になってるぜ」

「レグルスで無理なのかよ。そうなるとリギルを志望しているのかな？」

「いや、あそこはチーム加入に試験が有るだろ。あの子って確か試験の場にいなかったから、それは無いんじゃないか？」

「う～ん……分からんなぁ」

風に乗って、トレーナー達の会話が聞こえてくる。その声に促されるまま閉じた思考を一度断ち切り、視線を目の前に映るトラックへと向ける。

視界の先、トラック外部の一角を占める数人の集まり……その中にトキノメグルはいた。その横には呼吸を整えながらも悔しがるウマ娘の姿も。

あの日からトキノメグルは俺にアピールすべく、模擬レースを積極的に行っていた。

始めの内は可愛らしいものだった。俺に自分を担当バにしてもらうべく、同世代の中でもトレーナーを持つ、或いは既にデビュー戦を済ませているウマ娘達とレースをする姿は、仲間と切磋琢磨する青春真っただ中の健全な生徒に変わりなかった。その中で自分の実力を高め、いずれは俺にスカウトされる事を目指す……本当に健全な姿だった。

だがそれも、数日のうちにその様相を大きく変える。

模擬レースで勝ちを重ねていくうちに、いつしか彼女の元には挑戦状が届く様になった。ある者は面白半分で、ある者はその連勝記録を本気で止める気で、ある者は敵情視察で……動機は多々なれど、数々のウマ娘が勝負を挑んできた。中には重賞を勝ち抜いた者さえいた。

だがあろう事か、トキノメグルは未デビューであるにもかかわらずその全てを返り討ちにし……そして俺は、勝ちを重ねるトキノメグルの姿を間近で見せつけられて尚、彼女をスカウトしなかったのだ。

その頃からトキノメグルの焦りは目に見えて明らかになった。

徐々に増えていく練習量。模擬レースも引っ切り無しに行われた。……そして何よ

り、彼女はレースに勝っても笑わなくなった。
このままでは、歯止めが利かないまま心身共に磨り減ってしまう。このペースで足を酷使すれば怪我は免れないだろう。そうなれば仮に俺以外のトレーナーが就いたとしても、恐らく年内のデビューは……

「紫月トレーナー、ちゃんと見てくれていたかい？」
「……トキノメグル」
暗い思考を遮ったのは、いつの間にか俺の目の前に来ていたトキノメグル本人だった。
嗚呼、しまった。もう少し早く気づいていれば、この思考に苛まれて生気を失った男の顔を見せずに済んだだろう。その証拠に彼女の顔も瞬く間に曇ってしまっている。
「……その顔じゃ、スカウトする気にはなってないんだね」
「……すまない」
「謝らないでよ。私が惨めになってくるじゃないか」
「……」
少し笑みを浮かべながら冗談めいた口調で話しているものの、目が笑っていない。
「ねえ、見てたでしょ？さっき模擬レースをしてた相手、この前のＧ２で二着だった子だ

よ？ウイニングライブの舞台にも上がっていたし、知ってるよね？」
「……ああ」
「ッ！……私、勝ったんだよ!?まだデビューすらしてない高等部一年が、中等部一年からトレーナーに鍛えてもらってる高等部二年の子に！そりゃあたった一回の勝負で優劣が決まる訳じゃ無いのは理解してるし、自慢するのはあまり好きじゃないけどさぁ……でも、でもっ！私、頑張ったんだよ!?少しくらい褒めてくれても、いいじゃないか！」
「……凄いよ、本当に」
「それだけ、って……ねぇ、まだ、ダメなのかい？まだ私を、スカウトしてくれないのかい？」
「……ごめんな」
「〜〜〜ッ！」
　胃が瞬時に冷却されたような、そんな感覚に陥る。心拍数は上がってないのに、一つ一つの鼓動が肋骨を内側から圧迫している気がする。
　謝る事しか出来ない。例え彼女がそれを拒んでも、今の俺には謝る選択肢しか頭に浮かんでこない。
「……そう、だね。まだ私は『足りてない』って事だよね」

「っ……」
「不満を口にするのは、まだ早いよね。トキノミノルは、憎らしい程強かったもんね。じゃあそれを超える為には……G1ウマ娘くらいデビュー前に倒しとけって、そういう事だよね。それくらい将来性とインパクトが無いと、紫月トレーナーは認めてくれないって事だよね。……そう、言いたいんだね？」
「違うっ……君は何も悪くない！今の君だって十分すぎる程強いと思っているよ！」
「でもスカウトしないって事はそういう事だよね？」
「違う！俺の、俺自身の問題なんだ！」
「……仮にそうだとしても、私は紫月トレーナーに選ばれるための努力は止めない。いや、止められない。何もしないでいる時間が、苦痛でしかないんだ」
「それは……」
「じゃあ、行くね。今日はこのまま休むつもりだったけど、五月中旬までにG1ウマ娘に挑むとなれば……時間はいくらあっても足りない。今から練習を再開するよ」
「待ってくれ！前から言っているが、もう君の足は疲労が溜まりすぎているくらいなんだよ！明らかなオーバーワークだ！頼むからもう休んでくれっ！」
　トラックに戻ろうとしていたトキノメグルはその足を止め、首だけこちらに向ける。その目は何時ぞやの夜とは違い、片目だけを紫から緑に変色させていた。

「なら、私に命じてくれよ。トレーナーになって、私を担当にして、それから『休め』と、命じてくれよ。そしたら喜んで足を休めるさ」
「ッ……！」
「……もういいかな。じゃあ、またね」
トキノメグルはこれ以上振り返る事無く、トラックの方に戻っていった。
「どうすれば……良いんだ……」
このままでは、同じ過ちを繰り返すことになる。トキノミノルの時同様に、何もできないままウマ娘の足が壊れていく様を見続ける事になる。
「はは……」
何も変わっていない。停滞した時の中を駿川さんと共に過ごしておきながら、俺は何も学んでいない。
何か、手を打て。取り返しがつかなくなる前に、トキノメグルを止めろ。
――理事長に事情を話して、トキノメグルのトレーニングを禁止にするか？……恐らく可能だが、根本の解決にはなっていない。体が壊れるのは防げても、心が壊れるだろう。今度こそ自主退学しかねない。
――いっそのこと羽交い絞めにでもして無理矢理にでも練習を止めさせるか？

……最終手段としては有りだ。ウマ娘に人間の膂力では敵わないだろうが、やらないよりマシ。可能ならば反撃を喰らった俺が重傷を負って、彼女にほんの少しだけ罪悪感が生まれて練習を控える様になるのが一番有難い。だが、彼女は優しいから……罪悪感を過剰に植え付けてしまい、彼女のバ生に重しが出来るかもしれない。……なるほど、見込みの薄い博打だな。

どれもこれも、凡策ばかり。物理的に練習を止めさせることはきっと出来るだろうが、彼女の心も一緒にケアする方法が浮かんでこない。……全く、本当に度し難い奴だよ、お前は。

……自嘲は止そう。それをしたところで得するのは俺だけだ。

下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる。凡策を練っていれば、幾つかマシなのは出るだろう。そう信じて頭を動かして……

「……？」

ポケットの中で携帯が震えているのに気付く。取り出して画面の電源を入れると、駿川さんから通知が幾つか来ていた。

『トレーナーさん、大事な話が有ります』

『今日の夕方五時に、時間を空けています。小会議室を一つ押さえてますので、取り敢え

ず本校舎のエントランスに来てください』
『万が一来ないようであれば、夜に直接貴方の部屋に伺いますので悪しからず』
……大事な話、と来たか。
俺とトキノメグルとの会話が終わってから通知が来た辺り、会話は盗聴されていたと見て間違いないだろう。だが部屋を予め準備しているのであれば、突発的に掛かり状態となって通知を送ったわけではあるまい。それに部屋を取るという事は他人に聞かれたくない話である事は明白。
「行くしかないな」
新人トレーナーへ送られるベテランからの注意喚起として、『ウマ娘と二人きりで密室に誘われたなら警戒すべし』というものがある。具体的には鍵の開閉の権利を与えず、窓の高さや位置の確認、そして部屋に入る前には必ず学園から支給されたスマートフォン内にある緊急通報用のアプリを立ち上げておく様に言われる。
そしてトレーナーの被害現場ランキングで堂々の第一位に輝く『専用のトレーナールーム』には、幾つもの緊急脱出路や通知システムの起動スイッチが備え付けられている。流石にウマ娘側もそんなものを見せつけられればいい気分にはなれないだろうから、いい具合に隠されてはいるが。
それ程までにウマ娘と二人きりになるのはトレーナー連中にとっては危険な事だっ

た。
　おまけに最近まで不気味な程干渉が無かった駿川さんが、今このタイミングで俺を招集してきたのだ。本人も大事な話と言っているし、これらを鑑みて尚何も起こらないと思えるほど俺は楽観的な性格はしていない。
　だが、文句を言うのはあまりにも烏滸がましい。有効な手を何一つ見出せない俺に、与えられた選択肢を無下にする権利なぞ何処にもないのだから。
　五時まで残り数十分。覚悟を決めるには十分すぎる程の時間だ。

　まあ……覚悟なぞ、彼女が足を壊した時から毎日繰り返しているのだが。

■□■□■□

「紫月トレーナー」
「駿川さん……大丈夫ですか？」
「何がですか？」
「いえ、その……少し足取りが覚束ない様でしたので」
　エントランスの端にある目立たない椅子に座って待っていたところ、丁度五時に駿川

さんが入口の扉から一直線に此方にやって来た。
目に見えて明らかという訳では無いが、彼女のトレーナーだった俺から見れば今日の駿川さんの足取りはいつもと違う。どこか力無いというか、重いというか。
「大丈夫ですよ。……さあ、行きましょうか」
「……はい」
エントランスを抜けて小会議室へと足を進めていく。先程から聞こえる喧騒も目的地に近づくにつれて遠いものとなり、物音は駿川さんのヒールの音だけ。
「……」
「……」
無言。
普段なら何かしら会話をするものなんだが、彼女から話しかけてくる気配は皆無、そして俺から話を振れる雰囲気でも無い。
別に無言の状況は今までも幾度となくあった。だが……こうも気まずい沈黙は初めてだ。
「ここです」
案内されるがままに部屋の中へ入っていく。鍵を閉めた後にドアノブを破壊されないよう、さりげなくドア側の位置を陣取ってしまうのはある種俺の悪癖だった。

そういうちょっとした警戒に気付かないウマ娘ならば問題ない。だが……

「……そんなに警戒しないで下さいよ」

「っ！すいません、つい……」

「無自覚の方が傷つくものなんですよ、全く……」

駿川さんは普段からトレーナー達に警戒するよう呼びかけている側だ。バレるのは必至、よってこれは信頼を失う悪手だった。

はぁ、とため息を一つ。それで彼女も矛を収めてくれたらしく、机の上に手に持っていた資料を置き、向かいの椅子に腰掛ける。

「かけてください。きっと長話になりますので」

「はい」

椅子に座り、丁度真っ直ぐに駿川さんと向き合う形となる。エメラルドの瞳にはいつもの落ち着いた柔らかさも俺を糾弾する時に見せるキリリとした輝きも無く、ただ揺れていた。

「……」

「……」

駿川さんは何も切り出さないまま、目を伏せて資料を凝視する。角２封筒に入っているのでその中身までは分からないが、その封筒を掴む駿川さんの手が些か震えているの

を俺は見逃さない。余程重大な話なのだろう。
「……ふう」
深呼吸を一つ。割れ物を触るかのように駿川さんは封筒を開けて、中にある書類を二枚取り出す。そのまま俺に見える様に向きを変え、机の上に並べていった。
一枚は専属契約書。
もう一枚は、婚姻届だった。
「は……？」
訳が分からん。専属契約書の時点でかなり衝撃的だったのに、もう一方のインパクトが強すぎて……えっ？
「大事な話はこれです。今日貴方に……どちらを選ぶのか、決めて欲しいのです」
選ぶ……？
「彼女……トキノメグルを選ぶのであれば、そこの専属契約書を記入して下さい。私を選ぶのであれば、同様に婚姻届にサインしてもらいます。両方選ばないという選択肢も

無い訳では有りませんが……それでどうなるかは、想像出来ますよね？」
「冗談……ではありませんよね」
「勿論です。今すぐ書いて提出しろ、とまでは言いませんが……どちらを取るかの決断はしてもらいます」
　まさか駿川さんからこの話題を積極的に切り出してくるとは。俺が駿川さんを裏切ってトキノメグルのトレーナーになる、という選択肢を俺に与えている時点で、正直意外だ。
「私らしくない……と言いたげですね」
「……すいません」
「いえ、むしろ嬉しいです。貴方は普段から私の想いを軽く流すものですから……ちゃんと伝わっていたとしれて安心です」
「そう……ですか」
　くすり、と笑う駿川さん。だがその顔にいつもの余裕は無い。
「きっかけは……そう、二日目の選抜レースの夜。携帯の電源が切れた十七分間、貴方はトキノメグルと接触していますね？」
「……ええ」
　これは取り繕っても意味のない事。駿川さんだってそれ位は容易に推測出来るはず

だ。
「そして貴方は……彼女に『トレーナーになって欲しい』と言われ、保留にした。そうですよね？」
「……はい」
　あの場で断る勇気が無かった。かといってすぐさま承諾する訳にもいかず、今の今まで保留にしていたのだ。……いや、単に逃げていただけかもしれないか。
「私の事も有り、すぐさま返答をしない貴方にトキノメグルは焦りだし、そして今まさに躍起になってスカウトしてもらおうと練習している。貴方はその姿を見て、どうすれば一番場が丸く収まるか考えている。……そう、ですよね？」
「っ……はい」
　見透かされている。何もかも、全て。
　なら何故……駿川さんはこんなにも、冷静を繕っているんだ？
「あの日を境に、貴方も変わりました。いえ、正確には変わろうとしている、でしょうか。トレーナーを辞めてからの貴方は、なんだかんだ言いつつも私の行いのほとんどを許してくれました。教官への転職、盗聴の黙認等……色々有りましたね」
「そう、ですね」
「でも貴方はあの日から『揺れて』います。今までの行いからすれば、私という存在すら

天秤に掛けている今の貴方は……はっきり言って『異常』ですらありますから」
「……言われてみれば」
今までも俺の下に『トレーナーになって欲しい』と言ってくれるウマ娘もいない訳じゃなかった。トキノメグルだってあの子達と何ら変わらないはずなのに、トキノメグルだけは即決で断ることが出来なかった。『駿川さんを裏切る』という行為を有り得ないと認識しつつも、トキノメグルを切る事が出来ていない俺は、確かにいつも通りでは無かった。
「今の貴方は揺れています。つまり貴方がトレーナーとして、トキノメグルを他のウマ娘達とは明らかに別の存在として見ているから。そうですよね？」
「……いえ、それは単にトキノメグルが他のトレーナーを拒んでいるからですよ」
「それでもです。それでも貴方には放置するなり他のトレーナーに丸投げする選択肢もあったはずですが、それをしなかったのは……貴方が彼女を他のトレーナーに預けられる気がしなかった……いえ、預ける気が無かったから。なんだかんだ言って、貴方は彼女に魅入られているんです」
「……分かるんですね」
「当然ですよ。私は貴方をずっと『トレーナー』として見てきましたから」
彼女を一目見た時。俺は素直に彼女を担当にしたいと思った。

言葉で説明できるもんじゃない。何というか……そう、ビビッと来たのだ。トキノミノルをスカウトしたあの時と、同じ感覚を確かに覚えたのだ。

だから教官としている時も皆と分け隔てなく接しようとしても、ほんの少し、彼女を優先してしまう所があったのは否定できない。選抜レースの一日目終了時に、他の担当ウマ娘を差し置いてトキノメグルに真っ先に電話を掛けたのも、今から思えばその気持ちの表れだったのかもしれない。

「揺れている貴方を見て……私は何度も考えました。今まで通り、貴方を取られまいと？ぎ止めておくのが果たして本当に最善なのかと」

「私が貴方を『トレーナー』として見ているからこそ、貴方には良いトレーナーであって欲しいのです。私がまだ現役だったあの時を否定するなんて、私には出来ませんから」

駿川さんの目は俺を見ているようで……それでも何か、遠くにある別の物を見ているようだった。

「貴方が私の告白を断ったあの日……貴方の目に私は映っていませんでした。貴方は私の事を、一人の担当ウマ娘である『トキノミノル』としか見ていませんでした」

「あの日、初めて自分の足を呪いましたよ。……勘違いしないで欲しいんですが、もう走れなくなったこと自体に未練は有りません。ですが貴方はダービー以来、私の事を一人の女としてではなく『足の壊れた被害者』としてしか見てくれませんでした」

「それに、ウマ娘達にとってのトレーナーを手に入れる常套句である『トレセン学園卒業後もレースを見てほしい』という言葉……その伝家の宝刀を抜けなくしたのも、私の壊れた足でした」
「頭では理解していました。この足が貴方から私を担当バとして見る以外の選択肢を奪った事も、この足のせいでこの先貴方が私を担当バとしてすら認識できなくなる事も。……理解は、出来ました」

「……でも、それでも……それでも！納得なんて出来ませんよ……！」

俯いた顔は見えなかった。その代わりに、彼女の絞り出すような声が……悲痛な叫びが、全てを物語っていた。
「手放せないんです。想像すら、したくありません。貴方が他の女の所に行く姿を見るくらいなら……いっそのこと消えてしまいたいと、そう思えるほど！この『好き』という気持ちに、歯止めが利かないんですよ……！」
「っ……」
「だから、貴方を手放せないから、私はトレセン学園に今度はスタッフとしてやってきました。貴方が私を担当バとしてしか見てくれないのであれば、せめて貴方の元担当バと

して見られたかった。私の足が壊れたことを自分のせいにして責め続ける貴方の、その優しさに付け込んでまでして、私の事を見てほしかった！」

「忘れられたく……なかったんです」

　机の上に落ちる数滴の雫。

　嗚呼――――あなたが自分の為にこれ程まで心を痛めてくれているにもかかわらず、気の利いた言葉一つ掛けられない自分が、情けなくて仕方が無い。

「……幻滅、しましたか？」

「いえ、そのような事は、微塵も」

「驚かれないあたり、貴方も私の心の内を分かっていたんですね。私が貴方の考えている事が手に取る様に分かるのと同じ様に」

「そう……かもしれません」

　方向性は粗方、予想通りだった。

　それでも俺が思っているよりもずっと、彼女の想いは深く、濃密で……そしてその想いを今まで抑え込んでいた一種の優しさも……俺の中の小さな定規では測れない程、大

きかった。
「……貴方はいつもそうやって、私に嬉しい言葉を掛けてくれます」
「そんな事……」
「でも私がそうやって貴方の優しさに甘えている分……貴方は苦しんでいるのだと、気づきました」
「……！」
「私の本心に従うのであれば、今すぐにでも貴方をここから連れ出して別の場所にしまい込みます。それでも……あの日を境に目に見えて憔悴していく貴方を見て……やっと気づきました。私の我儘で貴方が苦しんでいるのだと」
「そんな事、言わないでください……！それにこれくらい……」
「『あなたの足に比べれば、大したこと無い』……ですか？」
「っ……」
「その気持ちは嬉しいです。けどもう、それに甘えていられなくなりました。一度、たった一度でも貴方が私の我儘で苦悩している姿を見てしまえば……もう、耐えられません」
「貴方なら……分かってくれるはずです。私の告白を断った貴方なら。例え相手が望んだことでも、この先自分の大切な人が自らの手で苦しむくらいなら……いっその事その

願いを断りたいと思った、優しい貴方なら」

「だから今度は、私の番なのです」

机に置いてある二枚の紙。専属契約書と婚姻届、それらを指で滑らせ、駿川さんは俺の目の前に差し出してくる。

「貴方は私が足を壊したあの日から、自分を罰し続けています」

駿川さんは、涙で濡れた頬のまま、泣き腫らした目で俺を真っ直ぐに見ている。

「能動的に何かをするのだって、極端に減りました」

震えていても、はっきりと紡がれた声。

「私のお願いを叶える為に、いつも受動的になって、自分を殺して。何時からか貴方は、私の話の返事ばかりをしていました」

それは正しく、覚悟を決めた人の声。

「私を……気遣って。私が怒っている時は、不満も面に出さずに、謝って。私が悲しんでいる時もっ……慰めの言葉を、掛けてくれて……！」

必死に堪えて、覚悟を滲みださせる、そんな声。

「だからっ……！今くらいは、貴方の『本心』を、言ってくださいッ！」
「貴方がっ……私以外の女をっ……え、選ぶので、あれば……う、うぅうぅうぅうっっッ……う、うけ、いれますっ……！」
「あな、たが……わたしを、すてると、いっても……！わたし、はっ……だ、だいじょうぶ、ですっ……！」
「だからっ！せめて……せめて、あなたのこころを、きかせてください……」

本心。

俺の、本心。

そうか……うん、確かにそうかもしれない。
何時ごろからか、あなたに本音で話す事が無くなってしまっていたのか。

あなたに傷ついてほしくないと願う一方で……あなたに喜んでほしいと思う気持ちを、無くしてしまっていたんだ。

それだけじゃない。今から思えばトキノメグルにだって、本音で接した事なんて一度も無かったな。

俺は……そう。一目見た時から彼女を担当にしたいと思っていた。

でも、教官だからと言って、俺はその気持ちに蓋をした。駿川さんが許さないと思い、その気持ちを受け入れなかった。かと言って、拒む事さえしなかった。

今の今まで一度も彼女に、自分の本心を見せたことなぞ無かった。だからこそ、俺のトキノメグルへ向ける本音は……そう、『担当バになって欲しい』という、純粋な気持ちだ。

でも……それだけか？

お前が本音で接していなかったのは、何もトキノメグルだけじゃないだろう？

そうだ。駿川さんにだって、本音で話していないじゃないか。

彼女が『トキノミノル』から『駿川たづな』になってから……俺は一度も本音を話していない。

なら……お前の心は何処にある？

――そんな事、言わないでください……！

違う。

――誓って疚しい事は何も

これも違う。

――あなたのトレーナーになれた事……本気で、誇らしいと思っています

これは返事だ。嘘じゃないが、心の奥底、その発露じゃない。

――本当に、ごめんよ……

心の奥底では有るが、そこじゃない。それは駿川さんに向けた言葉じゃない。足の折れたウマ娘に掛ける本音だ。

――だから、何もない新人の俺は誠実でありたかった。

……誠実で、いられたら。

――君が欲しい

嗚呼……そうだったな。

――――俺には君しかいないと、そう確信したんだ。君こそが最高のウマ娘に違いないと、そう確信した

それは彼女が、才能あふれるウマ娘だったからか？

……違う。

――――君を、一目見た時に

そうだよ。

俺はスカウトしたのは、才能溢れるトキノミノルではない。

たった一人のウマ娘であるトキノミノルだ。

彼女の担当になってからの日々は、そんなにも淡白なものだったか？

彼女と過ごしたあの日々は、足を壊した罪で帳消しになる程、脆いものだったのか？

俺の彼女との関係は、たった一つ嫌なことが有ったくらいで断ち切れるほど、細いものだったか？

俺の彼女への想いは、そんなに薄っぺらいものだったか？

ふざけるな。

そんな事、あってたまるか。そんな事実は認めない。断固として、認めない。

……ならば、どうする？

認めないのだろう？ならその想いは、伝えないとな。ちゃんと声に出さないと、誤解されてしまうぞ。

……有難い事に、今この瞬間、俺はこの心の内を話していいらしい。

嗚呼、実に有難い。今だけは、あなたの足を壊したことも棚に上げて、自分の本心をありのままに話せるのだから。

じゃあ、どんな言葉にしようか。

……いや、止そう。言葉を選ぶ必要なんて、何処にもないのだから。

覚悟は出来ているな？ならば口を開けろ。
空気を吸い込め。頭を上げろ。相手の目をしっかり見るのも、忘れないように。

さあ、行け――――

「好きです」

この溢れんばかりの愛を、あなたに届けるために。

ホームストレッチ

「……好きです」

閑散とした部屋に響く、そんな台詞。

少しばかり震える唇を意識して強張らせ、たった四文字の言葉を一文字一文字ひねり出す様にして紡がれた、そんな台詞。

心臓の音が異様なほど五月蠅い。先程までうっすらと聞こえていた外の喧騒は遂に跡形もなく消え去り、心臓を、首を、頭を、そしてこめかみを流れる血液が循環する音だけが鼓膜を揺らす。

駟不及舌。一度その言葉を声に出してしまった以上、それはもう戻ってこない。今できるのはただ、目の前にいるあなたから返事をもらう事だけ。

嗚呼、驚いておられるご様子。それもまあ当然の事かな。何せこうやってはっきりと自分の気持ちを口に出したことなんて、今の今までなかったから。

さあ……どうか。

あなたの返答を、聞かせてください。

「……えっ……？」

理解不能……と言うより、まるで信じられない物を見たかのように目を大きく開けて固まってしまう。

ならば……信じてもらうまで訴えかけるまで。

「好きです。他の誰でもない、あなたの事が好きなんです」

「う、うそっ……」

「嘘じゃありません。心の底から、本気で、あなたを愛しています」

「っ……！」

口をパクパクさせたと思えば、その場で俯いてしまい、小さく、小さく呟く。

「嘘、です。また貴方は、私を傷つけないように、嘘を言ってます」

「いいえ。……信じられないと言うのであれば何度でも言いましょう。俺は、あなたの事が……」

「嘘ですッ！」

顔を勢いよく上げ、その語気で、その目で激しく抗議の意を示す一方で……それでも

小刻みに震えている姿が、まるで昔に戻ったかのような気さえ起こさせる。
まだ時間が止まっていなかった、あの頃のような……そんな気が。
「貴方の本心は『トキノメグルをスカウトしたい』という想いでしょう!?私には分かります!貴方をずっとトレーナーとして見てきた、私なら!なら……なんでっ!どうして私を切り捨てないんですか!」
「今日は……やっとの思いで覚悟を決めて、貴方と話をしてるんですよ!婚姻届なんていう無理難題を押し付けて、少しでも後腐れの無いように私を切り捨ててもらう為に、頑張って耐えて、ここまでやってきたのに!……どうしてそこで、私を選ぶんですかッ!」
「どうして今、この場で……一番言って欲しかった言葉を掛けてくれるんですか……」
嗚呼、やっと分かった。
どうして駿川さんがあそこまで冷静にいられたのか。それは駿川さんが自分から裏切られようとしていたからだったからだ。
彼女は最初から……自分が選ばれない気でいたんだ。
「確かに、俺がトキノメグルを担当にしたいという気持ちも、本心です」

「っ！なら、どうして！」
「でもそれは、俺のトレーナーとしての側面です。俺……紫月晶という人間の本心はまた別ですよ」
「え……？」
「俺が今まであなたを『自分の失態でバ生を閉ざされた被害者』と見ていた様に……あなたも私をトレーナーとして……いえ、『本当の自分を見ていてくれた頃の紫月晶』として見ていたのでしょう……？」
「あ……」
気付いてみれば、何てことない話だ。俺達の想いは一見すると矛盾の中に閉じ込められていたようで……実のところは、案外ちっぽけな逆説に過ぎなかったのだ。
彼女は俺をトレーナーとして見ていた。俺は彼女から向けられる俺のトレーナー像が、認められなかった。だから俺は今の今まで彼女の想いに応えなかったのだ。彼女の想いを受け入れて、彼女を幸せにできる気がしなかったから。
でも本当は……駿川さんは俺に彼女のトレーナーとして居て欲しかったんじゃない。
俺に見てもらいたかったんだ。競走バとしての『トキノミノル』だけではない。彼女自身の内面……言うなれば『駿川たづな』としての側面を。
それに気付けなかった俺は、何時までも彼女の想いから逃げ続けていた。それこそが

……この六年間、ずっと停滞していた時間の正体だ。駿川さんが踏み込んできても、自分の欲望に従ってその想いに逃げ続けた愚かな自分が、この停滞した時間を生んだのだ。

でもそれは、ほんの少し俺が勇気を出して踏み込めば、直ぐにでも動き出す時間だった。

……彼女が俺を、トレーナーとして見ているだって？彼女自身を見ていた頃の俺……その影をずっと追っているだって？

……それがどうした。ならば振り向かせれば良いだけの事。昔よりも沢山、足の壊れたウマ娘としてではなく、彼女を……たづなさんを、見ていれば良いだけの事。

昔の自分じゃない。トレーナーとしての自分じゃない。今の俺を見てもらう為に……彼女の心に一歩踏み込めば。

それだけで、俺達の時間は簡単に動き出すのだ。

「俺はもう、あなたのトレーナーじゃない。あなたはもう、『トキ』じゃない。今まで気付けなかったけど、俺は一人のちっぽけな人間である『紫月晶』で……あなたももう、たった一人のウマ娘である『駿川たづな』だ」

「もう、逃げたりしない。何度だって言ってやる。……俺は、あなたが好きだ。『トキ』

じゃない、『駿川たづな』を……俺は、愛している」

カチリ、と。

たづなさんの中の時間が動き始める――そんな音がした。

幻聴だ。でもそれは……何時ぞやの様に、虚構である事を示すものでは無い。

「っ……うぅぅ……！」

心の内から湧き出る気持ちを抑えようとして、唇を固く噤み、目を潤ませ、顔を見られないように、俯いて。……それでも堪え切れずに、机の上に涙を落とす、あなたを見て。そうやって生まれた確信が音となって俺の下へとやってくる。

カチ、カチ、と……淀みなく動く時間は少しずつ、しかし着実に俺の中を流れる時間に同期していく。トキノメグルによって一方的に動き出した、俺の時間――それに追いつかんとばかりに、針は休むこと無く回り続ける。

そしてそれは、まるで歯車のように俺の時間と噛み合って、同じ時間を刻んでいく。

「たづなさん」

「……！」

もう二度と、止まりはしない。止めさせやしない。

「どうか俺と――――お付き合いしてくれませんか」

これからもずっと、俺はあなたと同じ時を刻み続けていたいから。

「……はい、喜んで」

ずっと、あなたの涙には弱い自分だけれども。

今だけは、その弱さがどこか心地いい。

顔を上げたあなたの……涙に濡れた笑顔を見ていると。

どこか救われたような気がするから。

「ところで……今日は五月二日、あなたの誕生日ですね」
「え？……あ、そういえば……」
「すいません……プレゼント、用意できてないんです」
「いえ、そんな……」
「なので」
「へ？……っ!?」
椅子から立ち上がり、向かいに座っているたづなさんに近づいて。
その額にそっと、口づけをする。
「……えっ???」
「婚姻届はもう少し時間を下さい。けど、俺が本気だという事を……信じてほしかっただけです」
「えっ？あれ？……えっ!?」
「それでは……少し用事が出来たので、失礼します」

「〜〜〜〜〜〜!?!?!?!?!?」

■□■□■□

小会議室の扉を閉める。ドア越しにたづなさんの声にならない悲鳴がうっすら聞こえてくるのを、努めて無視する。

「……」

少々、冷静さを欠いていたのは認めよう。遠い昔にトキノミノルをスカウトした時の様に、心の内から漏れ出た言葉をそのまま口にしてしまっていたな。

まあでも、恥ずかしいとは思わないのだが。

「……っと」

いけない、感傷に浸るのはまだ早い。俺にはまだすべきことが有る。

急いで玄関で靴を履き替え、校舎を後にする。向かう先は学園内のトラックだ。

既に一面は赤色に染まり、あと一時間もしない内に日は落ち切るだろう。学園内のウマ娘が利用する練習場所は様々あるが、それでも夜遅くまで空いているのはトラックく

らいだ。

だからこそ、まだトレーニングをしているであろう彼女は……そこに残っているはず。

「はぁっ……はぁっ……」

思えば、何時ぶりだっただろうか……こんなにも全力で走るのは。

すれ違うウマ娘達からの視線が刺さる。彼女らからすれば、男の教官が自分たちよりもはるかに遅い速さで走りながら息を切らしている姿は……どこか珍しいというか、変なのかもしれない。

革靴で舗装された道の上を走る。地面の堅さが、足の骨にずんずんと響いていてくる。

「はぁっ……っ……けほっ……」

肺がどんどん質量を帯びていく。空気が少しずつ重くなっていき、吐き出すのも一苦労だ。

けれど、それを不快だとは思わない。

「居たっ……！」

トラックに辿り着く。膝に手を突き、息を荒らげ、血流でぼやける視界を凝らしなが

ら……やっとの思いで彼女の姿を見つける。

今も尚、狂ったようにトラックを周回するトキノメグルを、見つける。

「っ……！」

見ていられない。疲労が溜まりすぎて、碌に足が持ち上がっていないじゃないか。このままでは疲労骨折の前に転倒による足の故障がやってくるだろう。

それに視界が極端に狭くなっているようだ。走っている最中に他のウマ娘に接触しそうになる事が今見ているだけでも何回かある。それも接触する寸前になって慌てて避けている辺り、何時事故を起こしても不思議じゃない。

今すぐ止めなければ、大惨事に繋がってしまう。

そう。あの時のような、大惨事に。

「っ……はぁっ……」

連打される深呼吸。それは全力疾走による息切れだけでは説明がつかない程で。

明滅する視界。一時的な酸欠くらいで起こる限度を超えていて。

フラッシュバックする記憶。いつか見た東京優駿で足を故障したウマ娘とトキノメグルが……やけに重なる。

苦しい。苦しい。苦しい。

苦しい……けど。

「お前はこの六年間……何やってたんだよっ！」

過ちは消えない。俺がトキノミノルの足を壊したという過去は、どうしたって消えない。

それでいい。元より自分の犯した過ちを忘れる気なんて微塵も無いし、これから先もずっと俺の中に残り続けるだろう。

大事なのは……そう。大きな失敗を犯してから、俺がどうするかだ。

罪を償うなら、そうすればいい。でももし、万が一、やり直せる機会があるのなら……その失敗を繰り返さないのが一番大事なことだ。

もう二度と、繰り返さない。あんな悲劇は一回で十分過ぎる程だ。

ならば、どうする？紫月……いや、『紫月トレーナー』よ。

このまま放っておけば、トキノメグルは間違いなく壊れるだろう。今すぐ彼女を止めなければ、また『終わる』ぞ。

「……」

落ち着け。落ち着いて、為すべき事を、為すんだ。

――――なら、私に命じてくれよ。トレーナーになって、私を担当にして、それから『休め』と、命じてくれよ。そしたら喜んで足を休めるさ

嗚呼、今日の出来事だけど……随分前の様に思える。

あの時の俺は、何も言えなかった。たづなさんの事もあったからこそ、彼女のトレーナーになる覚悟がこれっぽっちも無かったからだ。

でも、今は違う。

――――東京優駿の場でだって、どこでだって、止まってやる。君が『止まれ』と叫べば、その場で止まってやる。トキノミノルが無視した君の言葉に、私は絶対に従うと誓おう

そうか。それは有難い。なら今は、君の誓いに甘えるとしようか。

六年前……何もできなかった東京優駿とは違う。足を壊したトキノミノルを、ただ見

る事しか出来なかった俺とは……違う。

証明するんだ。今こそ……過去の自分にけじめをつける時。

……欲を言うのであれば、他の誰でもないトキノミノルに証明して見せたかったんだけども。

――そしていつの日か……『トキ』と、そう呼んで欲しいな

……分かったよ。

君が言った事だ。ならば今日くらい……君には『トキ』になってもらおうかな。

大きく、大きく息を吸う。

「止まれぇぇエエええエええッッ!!!トキィいいイイイッッ!!!」

あの日出来なかった事を、今、取り戻すのだ。

「ッッ!?!?」

俺の声に気づいたのか、トキノメグルの足がみるみるうちに止まっていく。

「ッ――――」

柵を乗り越える。

練習中で他のウマ娘もトラックの中を本番さながらの速さで走っているが……そんな事、知ったことではない。

「お、おい！危ないぞ！」

「戻ってこい！ぶつかったらただじゃ済まねぇぞ！」

周りのトレーナー数人から制止の声がかかる。

そりゃあ危ないのは百も承知だ。使用中のトラックの中を横切るなんざ、体の頑丈なウマ娘でさえ堅く禁止されている程危険な行為だ。それが人間となれば……衝突すれば命の有無すら天秤に掛けられるだろう。

だが……そんな事、些細な事だ。

バックストレッチで完全に停止したトキノメグルに……俺は今、近づけている。

今の俺には、その事実さえあれば十分だ。

彼女の姿はどんどん大きくなっていく。そして遂に、トラックの中に居る君に、触れる。

……まだ足の壊れていない『トキ』に、触れる。

「紫月……トレーナー？」

「取り敢えず、安全な場所に行こう」

「あの、君さっき私の事、トキって……」

「詳しい話は後にするぞ」

俺という乱入者がトラックの中に居る事とトキノメグルが止まった事も有り、他のウマ娘やトレーナー達も少々動揺している。おかげさまで今度はトラックの中を安全に移動できそうだ。

「え……きゃっ!?」

「悪いが、医務室までこのまま運ぶぞ」

「おっ、下ろしてくれっ！」

「それは出来ない相談だな」

足に負担を掛けないように、彼女を横抱き……まぁ俗にいうお姫様抱っこで来た道を引き返していく。

トラックを抜け、そのまま校舎へ戻っていく。さっきとはまた違う意味でウマ娘達の視線が突き刺さる。時折聞こえてくる黄色い声とトキノメグルの「うぅ～～」という唸り声はしっかり無視。

何とか手首を捻らせて医務室のドアを開け、空いているベッドの上に彼女を座らせる。そしてそのまま彼女の足を触診。

「ちょっ！いきなり何なのさ！」

「頼むから、少しの間動かないでくれ」

「っ……」

やや熱っぽい部分があり、筋肉もかなり張っている。骨の位置も万全とは言い難い。

でも、それだけだ。

「良かった……本当に、良かった……」

重大な病気や損傷は見当たらない。勿論後で精密検査は受けさせるが……それでもこの先彼女のバ生が消える様な、そのような事にはなるまい。

「で、いきなり何なんだい？やけに強引じゃないか」

「それは……済まなかった。だがあの状態で走っていれば、直ぐに足が故障するか事故をしていただろうからな」

「……で、態々『トキ』だなんて呼んだと。……そこで止まってしまう私も大概だが、君もそう易々とその呼び名を使わないでおくれよ」

目に見えて明らかに不機嫌な顔を浮かべるトキノメグル。どうやら彼女は俺が練習を止めるために都合よく呼び名を利用しただけだと思っているらしい。

「そうだな。まだ、トキと呼ぶには早かったな」

「反省してよね？全く……ん？『まだ』？」

なればこそ……その勘違いは正してやらんとな。

たづなさんから渡された二枚の書類、その片方を鞄から取り出し、トキノメグルに渡してみる。

「これ……って、まさか、専属契約書!?」

「ああ。とはいっても、まだトレーナーじゃないから受理なんてされないけどな」

「そんなのどうでもいいよ！そんな事より、これを私に渡すってことは、もしかしなくても……」

「おっと、その先を言うのはストップだ」

トキノメグルからは散々逆スカウトを受けてきたからこそ、今から俺がすることは所詮出来レースに過ぎない。

だが、俺は今まで彼女の想いを受け流し、自分の気持ちを伝えてこなかった。だから

こそ……ここで俺から彼女をスカウトする事に、大きな意味がある。
俺が彼女の要望に流れるまま従った訳じゃないという事。延いては、俺が嘘をついている訳じゃないという事。
それをどうしても、トキノメグルに知って欲しかった。

「トキノメグル――――君を、スカウトしたい。俺の担当になってくれないか？」
「～～～！はいっ！喜んで!!」

今度こそ、俺は育て切って見せる。
だがそれは、『トキ』を育てるんじゃない。他の誰でもない、『トキノメグル』というウマ娘を……俺は担当するのだ。
目標は大事だ。だから彼女の『トキを超える』という動機にいちゃもんを付ける気は無い。
でも……いつか君が、『トキ』という存在を凌駕した時に、今度は自分自身の目標を立てられる様に。その姿を夢見て。その姿を楽しみにして。
俺は、トキノメグルのトレーナーになる。
こんな俺だけど、それでもトレーナーになって欲しいと言ってくれた君に。その笑顔

に。その……緑色に輝く瞳に。
俺は、そう誓ったのだった。

■□■□■□

五月二日、あの日を境に俺は勿論、俺を取り巻く環境が大きく変わった。
たづなさんとは正式にお付き合いする事になり、トキノメグルとは事実上の専属契約を結んだのだ。
そして急かされるままにトレーナーライセンス更新試験の申込用紙を窓口に提出。有難いことに、試験が終わるまで教官としての職務はある程度抑えられ、何故か引き継ぎが主となった。……たづなさんはまぁいいとして、秋川理事長からのその妙な信頼は一体……
そして約一ヶ月の間、教官としての業務をしながら試験の勉強をするという少々ハードなスケジュールをこなしてきた。久方ぶりに開いた教材は思いの外重かったのを覚えている。
更新試験が有ったのは丁度一週間前。そしてその結果が今日……六月二十日に開示される。

その結果を聞きに行くために、今俺は朝っぱらからトキノメグルと生徒会室まで態々足を運んでいるという訳だ。
「なぁ、ちゃんと結果は午後に発表されるんだから、朝からそれを聞きに行くのは迷惑じゃないのか？」
「大丈夫だって。ルドルフ会長にも話はつけてあるし、何より私も生徒会役員だからね」
「あのしっかり者のシンボリルドルフが許可を出すとは思えんのだが」
「しっかり誠意と熱意をもって話したら首を縦に振ってくれたんだ。本当に優しいよ、ルドルフ会長は」
「……菓子折り案件だな、これは」
絶対強引に迫っただろ。うわぁ、一気に生徒会室に行きづらくなった。おかげで生徒会室まで伸びるこの廊下が妙に長く感じる。

……そう言えば、四月の最初あたりにもこうやって生徒会室まで来たっけ。
「許す、ね。……まだまだ難しいよ」
何時か零した独り言を拾い上げる。
……なあ、過去の自分よ。
自分の事を許さなくたって、それはそれで別にいい。反省しないよりはする方がマシ

だからな。
でも……だからって同じ過ちを繰り返さない為に何もしない、っていうのは勿体ないぞ。折角反省したんだったら、その反省を活かした方が良いからな。
俺だって誰かに背中を押してもらわなきゃ何も出来なかったから、偉そうには言えないけども。
意外と勇気を出して一歩を踏み出すのも……悪いもんじゃないぞ。
「?……どうしたんだい?」
「いいや、何でもない」
……なんてな。少々格好つけすぎたかな。でも、お前は昔の俺なんだから大目に見てくれ。
じゃあ俺は……行くよ。
「ほら、ついたよ」
「……ああ」
恥ずかしい妄想はすっぱりと断ち切り、促されるがままに生徒会室に入る。
「やあ。久方ぶりだね、紫月トレーナー」
「……シンボリルドルフ」

……あれ？
「今『トレーナー』って言ったか？」
「……あっ」

■□■□■□

「ルドルフ会長でもあんなミスするんだね」
「まぁ……昔は結構おっちょこちょいだったしな」
「えっ」
「彼女がまだ中等部一年の時の話だよ。あの頃はまだトレーナーにべったりだったし」
「へぇ……想像できないな」
「……これ、シンボリルドルフに言うなよ。絶対後で不味い事になる」
今はしっかりと皇帝として頑張っているんだ。ならばその一面を評価してあげるのが正当だろう。
「まぁちょっと拍子抜けしちゃったけど、試験、合格して良かったよ！」
「ああ、有難う」
更新試験は筆記、実技の二つに分かれているが、問題なのが筆記の中でも倫理に関す

る部分だ。
明確な答えや配点が存在していない領域。答えの無い問に対し、受験者がどう答えるかでその人の人格や思想を評価する。
俺みたいな凡人では『試験の時だけ綺麗ごとを並べてくる奴もいるだろうに』とつい考えてしまうが、どうやら秋川理事長によると嘘はバレバレらしい。
そういう内部情報もあって、今回俺はバ鹿正直に答えを書いておいた。もしかしたらそれが功を奏したのかもしれないな。
「で、これからどうするんだい？」
「午後になったら恐らく秋川理事長から何らかの連絡が来るはずだ。それに備えておくよ。……ああ、トレーナーバッジは探しておかないとな」
トキノメグルが部屋に突撃してきたのは早朝。たづなさんによる部屋の強化が相まってドアが破壊されることは無かったのが幸いか。
シンボリルドルフもこんな早朝から生徒会業務を始めていたわけではなく、送られてくる書類に目を通して粗方の予定を立てていただけだ。本来なら直ぐに切り上げて早朝トレーニングをするのだろうが、トキノメグルが無理を言って少しの間留まってくれていたらしい。本当に申し訳ない。
何が言いたいかというと、正式に俺がトレーナーとして復帰できるのは早くとも明

日。つまり、今俺とトキノメグルは正式には契約関係に無く、従って朝のトレーニングも出来ない以上こうやって授業が始まるまで時間を潰している訳だ。

そう言えば、朝一番のコーヒーを飲んでいなかったな。

近くにある自販機に硬貨を入れ、適当に缶コーヒーを選ぶ。下の口から落ちてきたそれを取り出し、カコッ、という音と共にプルタブを缶の中に押し込む。

「へぇ、紫月トレーナーってブラック飲めるんだね。私は苦くて無理だな」

「ん……ああ、間違えた」

朝は糖分を頭に入れておきたいから、結構甘い奴を飲むんだけどな。

まあ、いいか。

「俺は微糖の方が好きだよ」

「そうなのかい？」

「でもまあ、たまにはこんなのも悪くないな」

近くのベンチに座り、ほっと一息……

「紫月トレーナー～～～!!」

「んぐっ!?」

「……駿川さん」

一息つけなかった。

超特急でこちらに向かって走ってくるたづなさん。正門前で挨拶は……まだ時間が有るか。

「何ですか、いきなり」

「それはこっちの台詞ですっ！貴方、なんてこと試験に書いてくれたんですかっ!?」

「試験……？そんなに不味い事、書きましたっけ？」

「どうせあなたたちならもう試験結果は知ってますよね！」

「ああ、はい」

「なら、これを見てくださいっ！」

怒り……というより、どこか恥ずかしそうにしながら彼女は俺の目の前に試験の解答用紙の写しを見せつけてくる。

「ここです、ここっ！」

「ん？どれどれ……」

筆記、問題範囲は『倫理』。

Q.　あなたの担当が何らかの理由で再起不能に陥ったとします。その時、あなたなら担当にどう対応しますか？

A.　後日指輪と共にプロポーズをして、引退後の担当バの人生をサポートする

「何ですかこれぇぇぇ!?」
「ああ、こんなことも書きましたね」
　ううむ。俺としては満点解答なんだが……
「恥ずかしかったんですからね!?理事長、朝からこの解答を見てずっとニヤニヤしながら私の方を見てくるんですから!『愉快ッ!この解答、たづなが採点してれば満点だったんだがな!あっはっはっは!』とか言ってくるんですからね!?」
　まぁ……確かにこれは少し恥ずかしい解答をしたのかもしれない。
「正直に書いただけなのになぁ……」
「……えっ」
「ん?……あっ」
　これって……ひょっとしなくても、俺も先程のシンボリルドルフみたいに盛大なネタバレをしてしまったか……?
「あ、あの……」
「まぁ……何というか。楽しみにしておいてください」
「～～～～ッッッ!?!?」
　林檎の様に頬を真っ赤に染めるたづなさん。……俺ももしかしたら、同じような顔をしているかもしれないけど。

「はい、ストップ」
「ん？」
「全く、私がいるのによくそんなイチャイチャできるね。あれかな？そんなに私を怒らせたいのかな？」
「うっ……」
　まあ怒るのも無理ないか。俺だって自分が無視されたままカップルが二人の世界に入っていたら気分は良くないし。
「トキノメグル……さん」
「こうやって間近で見るのは選抜レースの夜以来かな？駿川さん」
「そうなりますね」
　言われてみれば、二人が直接話をしている場面ってあまり見たことが無いな。トキノメグルがライバル視しているだけあって、見るからに穏やかな雰囲気ではない。大丈夫かな？
「紫月さんから聞きましたよ。何やら現役時代の私を超えると、そう明言したらしいですね」
「そうだね。特に東京優駿のレコード、あれ邪魔だから私が更新して元の記録は粗大ごみにでも出しておいてあげるよ」

粗大ごみって……

「それだけじゃない。その内お前の愛称である『トキ』だって……すぐに奪ってやる。今はその場所に甘んじていればいいさ。いずれ私は……」

「ふふっ♪」

「……あ？何が可笑しい？」

「いえ。私はもう『トキ』ではありませんので。はっきり言ってしまえば、既にその愛称はどうでも良いのです♪」

「……へぇ」

「まぁでも、貴女がその名前を欲しいというのであれば、どうぞ差し上げますよ？そして貴女は一生『トキ』のままで満足していればよいのです。だって……」

俺をそっちのけで話が展開され、正直ついていけなくなっていた所で。

たづなさんはいきなり俺の右腕を両手で絡めとり、引き寄せてくる。

「私は既に『駿川たづな』として、別のレースを走っていますので♪」

「……上等だ。ならばその場所も……いつか奪ってやる」

「ふふ、その前にまずは……本当のレースを勝ち抜いて下さいね？」

「無論だ。覚悟しておけよ、『駿川たづな』」

「ふふ、まあ貴女が引退しても彼の隣が残っていれば……相手をしてあげますよ、『トキノメグル』さん♪」
「ふんっ」
　何故か話に決着が着いたようで、トキノメグルは苛立ちながらも校舎の方に向かい、その場を後にする。その目は何時にも増して深い紫色だった。
「一体、何の話ですか？」
「ん？いえ、何でもありませんよー？」
「えぇ……」
　はぐらかされた気が拭えないまま、たづなさんはベンチを立ち上がる。そろそろ正門前で挨拶をする頃合いか。

「ねぇ、紫月さん」
「何ですか？」
「『恋はダービー』って……聞いたことあります？」
「まあ、知識程度には」
「それは良かったです」
　ベンチから立ち上がったたづなさんは、こちらを振り返り。

「私って、ダービーウマ娘なんですよ」
「ええ、そうですね」
「レコードも取って。誰よりもダービーが得意と言っても過言では有りません」
「そう……ですね」
「おまけに、生涯無敗です」
「……」
「ええ、ですから」

「覚悟しておいてくださいね？紫月さん」

「今度のダービーも……『駿川たづな』として、勝って見せますから！」

眩しい程の笑顔と、透き通るようなエメラルドの瞳で。

彼女はそう――――宣言したのだった。

「駆け抜ける『　』」終わり

おまけ
あとがき

羊羹です。

恐らくこの文章を読んでいる方は本編を最後まで読んでくださった方だと思います。

この作品は自身の初投稿作品ですので正直拙い部分も随所に見られたかと思います。にもかかわらず最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

さて、この後書きは本編での設定、及び本編で織り交ぜた小ネタの解説を旨として書かれています。本編のｉｆルートや後日談とは異なりますのでご注意下さい。

では、改めてどうぞ。

〈設定〉

・登場人物

名前　紫月晶（しづきあきら）

誕生日　２月１５日

モチーフ　アメジスト（別名　紫水晶）

トキノミノルの元トレーナー。彼女の脚を壊して以来、トレーナーではなく教官としてトレセン学園に勤務している。難しいはずの更新試験を一発でクリアしていたり、トレーナー育成の専門学校（四年制大学や短期大学など）を経由せずに高校卒業後直ぐにトレーナーバッジを獲得したりと、そこそこ優秀だったりする。因みに更新試験の倫理領域の点数はかなり低め（相当極端なことを書いていたため。なお秋川理事長には好評だった模様）、その分筆記と実技で点を稼いだ。

名前　駿川たづな（トキノミノル）

誕生日　５月２日

モチーフ　エメラルド

東京優駿で足を壊しても走り切ったやべーやつ。なお現在は当時の七割程度の実力しか出せません（それでも色々やばいです）。

職権乱用をした回数で彼女の右に出る者はいない。なお全部バレていないｏｒ理事長から許可を貰った模様。

名前　トキノメグル

誕生日　６月２０日

モチーフ　アレキサンドライト

紫月以外トレーナーとして認めないやべーやつ。ポテンシャルはかなり高め、紫月曰く「トキノミノルと同じ衝撃を受けた」とのこと。

生徒会役員の一人。実は裏で紫月に関する情報を漁ってたり。

瞳の色は紫色と緑色、本人の意思とは関係なく変化。心情に応じて変化する。オッドアイになっている時を見れたらラッキーです。

・時系列

（左の数字は紫月の年齢）

１８　高校卒業、ライセンス取得から丸ゼロ年（通常ライセンス所得の為の短期大学に通うのがセオリー）サブトレーナーとして勤務

１９　丸一年　始めてのスカウト。トキノミノルは高等部一年（つまり十五歳）

２０　丸二年　トキノミノル、高等部二年。デビュー戦をこなす

２１　丸三年　トキノミノル、高等部三年。東京優駿を取る。足を故障。告白を断る

２２　丸四年　駿川さんがトレセン学園に職員としてやってくる。シンボリルドルフが中等部一年で入学、紫月は教官となる

２３　丸五年

２４　丸六年　トキノメグルが中等部一年で入学

２５　丸七年　トキノメグルが生徒会加入
２６　丸八年
２７　丸九年　トキノメグルが高等部一年になる
～本編開始～
４月１日　第一話
４月８日　第二話
４月１５日　第三話
４月１６日　第五話
５月２日　第六話、第七話
６月２０日　第七話

〈小ネタ〉
・『トキ』と『時間』
この物語は『トキ』と『時間』をかけています。トキノミノルは『時の実り』を、トキノメグルは『時の廻り』を意味しています。具体的に言うと『時の実り』は長年募らせた恋の成就、『時の廻り』は新たな『トキ』の誕生です。
この話はどちらかと言えば時の実り……つまりは終わりを重視しているので、第一話

は何としても6月２０日に投稿したかった訳ですね。
６月２０日は競走馬としてのトキノミノルが没した日。この物語はトキノミノルが終わる日にこそ始まるべきだと思ったからです。
（実はその日にはまだ最終話は出来てませんでした。ので、最終話の投稿が遅れたのは作者本人の試験対策期間が被って執筆及び校閲が遅れたからです。ごめんね）
また、メグルの誕生日を6月２０日にしたのは『トキ』の引き継ぎを暗示していたりもします。が、もう一つ6月に誕生日を設定する必要が有りまして。それは後述の『宝石との関連』にて詳しく。
だから最後の最後に「駆け抜ける『　　』という様に空欄にしたのは、駿川さん自身が『トキ』である事に固執しなくなったこと、並びにメグルにその名前が引き継がれた事を表しています。

・宝石との関連
本編にてやたらと宝石の事が出てきたと思います。具体的には、
↓トレーナーの仕事はウマ娘の中から原石を探し出し、それを磨いて宝石へと仕立て上げる事、と例える
↓駿川さんの瞳をやたらとエメラルドに例える

↓紫月晶という名前
↓トキノメグルの誕生日が6月と予め言った事
↓トキノメグルの瞳の色の変化
などなど、今挙げた以外にも数多くヒントを散りばめています。勘のいい方なら紫月の名前で違和感を覚えたかもしれませんね。
実は設定に記してある登場人物一人一人にはモチーフとなる宝石が有ります。そして各々のモチーフとなった宝石には『石言葉』と呼ばれる宝石に込められた言葉や想いが有り、登場人物にはその石言葉を体現してもらいました。
では、具体的に一人ずつ見ていきましょう。
紫月晶のモチーフはアメジスト（別名　紫水晶）です。アメジストの担当する誕生月は2月（紫月の誕生日も2月）、石言葉は『誠実』です。他にも幾つかありますが、この話ではこれを採択しました。
誠実さとは駿川さんとトキノメグル、二人に対して正直になる事です。最終話になってやっと、正直になれましたね。
次に駿川さんについて。彼女のモチーフはエメラルドです。エメラルドの担当する誕生月は5月（史実のトキノミノル、ウマ娘の公式設定による駿川さん、両者ともに誕生日は5月2日です。何かきな臭いですね）、石言葉は『愛の成就』です。

元々駿川さんの服装が緑だったことも含めて、エメラルドはピッタリだな、と思いました。石言葉も『愛の成就』で、しっかりとこの話の主軸を担っていますね。

（実は最初から石言葉になぞらえようと考えてこの話を書いた訳ではないんです。石言葉について知った時、既に物語の構想はある程度固まっておりまして……偶然エメラルドの石言葉とこの話の本筋が合致してるもんでしたから、当時の僕は相当に驚いてました）

最後にトキノメグル。彼女のモチーフはアレキサンドライトです。アレキサンドライトの担当する誕生月は６月（メグルの誕生日は６月２０日）、石言葉は『秘めた思い』です。

アレキサンドライトと聞くと「なにそれ？」と思う方もいると思いますので、軽くこの宝石の特徴から。

アレキサンドライトの代表的な特徴は『色が変わる』という点です。宝石に当てる光の波長の違いで目に映る宝石の色が変わり、ものによって多少の誤差はありますが、アレキサンドライトは赤紫～緑と色が変化します。

ここまで来ればもう分かりますね。トキノメグルの瞳の色の変化、あれは彼女のモチーフとなる宝石を表しています。なお『色変化が何を意味するのか』等の詳細は後述の『トキノメグルの目の色変化について』にて。

さて、メグルもほかの二人同様に石言葉を体現していますね。『秘めた思い』……彼女にピッタリだと思います。小さい頃に見たダービーでの紫月の様子を見てから高等部一年になるまで、紫月からスカウトしてもらうためにずっと気持ちを抑えていましたからね。

（しつこいですが、本当に誕生石を決めてから物語の構想を書いたわけではないんです。僕からしたら偶然たまたま、六月の誕生石の色が緑と紫で、その上石言葉が秘めた想いだったんですよ。当時はびっくりして、逆に笑ってましたね。）

以上の様に、誕生石はこの話の中でも『『トキ』と『時間』』の次くらいにこの話の根幹に関わっています。それは次の『トキノメグルの目の色変化について』を見ても明らかだと思います。

・トキノメグルの目の色変化について

十二色相環、ってご存じでしょうか?そうです、学校で美術の時間に習いましたよね。

あれを思い浮かべた僕は「駿川さんって緑色やし、じゃあ主人公はその補色関係にある紫が似合ってるんちゃう?」と安直に考え、その結果主人公の名前に紫を入れる事が確定しました。

そうやって生まれた緑と紫の関係ですが、メグルの作中での瞳の色は紫月の『紫』と

駿川さんの『緑』、この二色を行ったり来たりしている訳です。だから何の意味もなく「目の色変わるの、かっこよくね？」と僕が思ってこの設定をつけた訳では有りません。（かっこいいとは思うけど）

さて、メグルのモチーフはアレキサンドライトですが、勿論メグルの目の色は本物の宝石の様に当てる光の波長で虹彩に映る色が変わる訳ではなく、あくまで色変化は彼女の心情にのみ依存しています。具体的には、彼女の瞳は本人の意識がウマ娘である方に傾けば紫色、人間の方に傾けば緑色となります。

当たり前ですが、彼女はウマ娘なので普段は紫色の瞳をしていますし、滅多なことでは緑にはなりません。

ですが、彼女が紫月と居る時、且つ彼女が紫月に強い感情を向ける時……『紫月が欲しい』という、ウマ娘としてより、一人の雌として、その想いに本人の意識が傾いた時……彼女の目は緑に変わります。

実を言うと、物語の中でメグルは紫月に対しての恋愛感情を自覚していません。あくまで紫月にトレーナーになって欲しかっただけで、彼の誠実さには惹かれたが恋愛感情は無い……と、無意識的に彼女は捉えております。まぁだからこそ修羅場ＢＡＤＥＮＤは回避出来たんだけどね。

だから最後の最後にメグルが「その場所も奪ってやる」と言った時、彼女の目は深い

紫色でしたよね。それに本編で『好き』とか『愛してる』という言葉、一度としてメグルは発していません。恋愛感情を自覚していないことを表していたりします。（若干こじつけ感があるのは認めます。）

逆に言えば、彼女の目が濃い紫になる時は基本的にウマ娘としての『速く走る、一着を取る』という思いが強いときですね。選抜レースの時や、本編最後などです。（ハイライトの有無は目の色に関係ありませんのでご注意を。彼女がただ重馬場してるだけです）

因みに彼女の目がオッドアイになる時、それは彼女が酷く動揺している時となってます。六話でオッドアイになったのは『紫月は欲しいけど、そのためにはもっと速くならないといけない』と言う、よく分からない状況になったからですね。

・『あなた』と『貴方』

実は同じ第二人称である「ｙｏｕ」を意味する言葉ですが、漢字とひらがなで使い分けてたりします。

あなた……紫月が駿川さんを呼ぶとき

貴方……駿川さんが紫月を呼ぶとき

こんな感じです。（なお駿川さんが動揺したり感情が高ぶったりした時は例外的に紫

月をひらがなで『あなた』と呼んでいます。その方が表現の起伏が有って面白かったので。）

第一話冒頭の告白のシチュエーション、有りましたよね？あれ、駿川さんが紫月に告白したのか、紫月が駿川さんに告白したのか、わざと分かりにくいように暈したんですよ。

おまけに第一話で紫月が『駿川さんの告白を断った』と言いましたよね。あれで僕は「しめしめ、これで数人は最初の冒頭の告白を駿川さんがやったのかと勘違いするんちゃうか？」と一人ニチャニチャしてました。本当に性根が悪い。

さて、何でこんな話をしたのかというと、実はこの二人称の呼び方の違いで冒頭の告白は誰から誰にしたのか、はっきりと分かるようにしたんです。（元から紫月が告白したと解釈した方なら、逆に気付かないかもしれないですね）

なお他の登場人物の第二人称は深く考えてないのでご注意を。

・各話の題名

小ネタと態々言うほどのものでは有りませんが、各話の題名は競馬のトラック、その各所の名前です。

ホームストレッチという題名の話が二つ出てきましたよね？そうです、第一話と最終

話です。同じ冒頭で始まっているんですが、あれで紆余曲折ありながらもトラックを一周してきた事を再現しよう……と意図しています。（単に伏線を敷いていただけとも言える）

またバックストレッチが題名となっている話が過去編だったので、最終話で紫月がメグルに駆け寄るシーンにおいてはメグルをバックストレッチに配置しました。過去のトラウマにけじめをつける、或いは過去をやり直す、というシーンでしたので。

・缶コーヒー

ちょくちょく話の中に缶コーヒーが出てきたと思います。実は缶コーヒーは紫月自身を表していたりします。

微糖の缶コーヒーは変わる前の紫月、ブラックの缶コーヒーは変わった後の紫月、という感じですね。

第一話で紫月はブラックを飲もうとして、それでも間違って微糖を買っていましたね。止まった時間の中に居る自分を鑑みて頭の中では変わろうとしていても、結局変わる事の出来ない紫月自身を象徴しています。また、駿川さんが微糖の缶コーヒーを奪い取ったのは変わろうとする紫月を牽制する、或いは変わる前の紫月を欲している事を表してます。

次に第五話でメグルが紫月の忘れていった微糖の缶コーヒーを目の前で握り潰すシーンが有りましたね。あれは過去の紫月の一方的な破壊、要は紫月だけの時間をメグルが無理矢理動かした事を表してます。

最終話でブラックを飲むシーンはそのまんまです。過去にけじめをつけ、紫月の内面が変わった事を表していますね。この辺りで気付いた方もいるのではないでしょうか。

〈まとめ〉

設定のほとんどは本編で書いたので、ここに書いてあるものは相当少ないです。トレーナーライセンスの設定は自分で書いているにもかかわらず、相当難解だと感じました。許してください。

小ネタについても、ここで取り扱っているのは本編での説明がなかったり、本編内の描写だけでは読み取りにくいものに絞っています。話の本筋を解説したものでは無い事に注意してください。

さて、あとがきだけでかなり長くなってしまいましたね。ここまで読んで下さり本当にありがとうございました。

実を言うと、この話は初投稿作品ではあるんですが別に書いてる長編の息抜きで書い

たものなんです。なので、もしかしたらまた僕の作品を手に取って下さる機会があるかもしれません。その時は「ああ、なんかまたやってるな、こいつ」みたいな温かい目で見てくれると有難いです。

では。